

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書 第28集

西別府廃寺Ⅳ

2018

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書 第28集

にし べっ ぶ はい じ
西 別 府 廃 寺 IV

2018

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、原始・古代の集落跡等の埋蔵文化財が数多く分布することで知られています。こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。

しかしながら、近年においては、多くの開発行為に伴い、我々の郷土の景観は日々変化しております。このような現状の中で、失われつつある文化財を保護し、それらを次世代に伝えていくことは我々の大きな責務であります。

さて、今回報告する西別府廃寺は、熊谷市西別府地区内に所在する古代寺院跡の遺跡であります。古くから周辺から古代瓦や瓦塔片が採集され、これまでに4次の調査を実施し、寺域や建物跡の存在が明らかになりつつあります。

また、この遺跡と隣接する西別府祭祀遺跡、西別府遺跡、そして隣の深谷市の幡羅官衙遺跡を含めた4遺跡は古代の幡羅郡家及びそれに関わる遺跡であることが分かり、幡羅官衙遺跡群として当時の地方行政の実態を明らかにする上でも重要な遺跡群であります。

この度、本報告の遺跡の一部に社会福祉法人別府会から、既存の特別養護老人ホーム永寿苑の事務所・多目的ホールの増築工事の計画が持ち上がりました。熊谷市教育委員会では、遺跡の保護と保存についてその関係者との間で協議を重ねましたが、記録保存のための措置を講ずることとなりました。

調査は平成28年7月19日から9月7日にかけて実施し、本書はその成果をまとめたものでございます。

なお、本書を刊行する直前に、幡羅郡家の幡羅官衙遺跡と、それに付属する祭祀場である西別府祭祀遺跡が、国指定史跡となりました。今後は、さらに注目を集めることになるとともに、隣接する本遺跡も、この度の調査結果が重要な報告となるものと考えられます。

本書が、埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を御理解、御協力を賜りました社会福祉法人別府会、及び地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市西別府字西方 1599 番 5 に所在する西別府廃寺（埼玉県遺跡番号 59 - 002）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会からの指示通知は、平成 28 年 8 月 2 日付け教生文第 2-23 号である。
- 3 本調査は、特別養護老人ホーム事務所・多目的ホール増築に伴う事前の記録保存のための発掘調査であり、熊谷市西別府官衛遺跡群調査会を設立し、本調査会が実施した。また、整理作業については、熊谷市教育委員会が行った。
- 4 本事業の組織は、I 章のとおりである。
- 5 発掘調査期間は、平成 28 年 7 月 19 日から平成 28 年 9 月 7 日までである。
また、整理・報告書作成期間は、平成 29 年 4 月 3 日から平成 30 年 3 月 23 日までである。
- 6 発掘調査は腰塚 博隆が担当した。また、本書の執筆・編集は熊谷市立江南文化財センター内作業員の協力のもと腰塚が担当し、吉野 健がその補佐をした。
- 7 写真撮影は、発掘調査、出土遺物ともに腰塚が行った。
- 8 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 9 本書の作成にあたり多くの方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします。
(敬称略 五十音順)
公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 池田 敏宏
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 昼間 孝志
国立大学法人島根大学 大橋 泰夫
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課
深谷市教育委員会文化振興課

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

S K…土坑、P…ピット、S X…性格不明遺構

- 2 遺構図面中の表記記号は、次のとおりである。

S…川原石 P…土器

- 3 本文に登場する遺跡名は次のとおりに省略する。

西別府廃寺第1次調査 → 廃寺Ⅰ、西別府廃寺第2次調査 → 廃寺Ⅱ

- 4 各遺構出土遺物の編年は、参考文献の吉野健 2013 による編年を用いた。

- 5 瓦塔は、主として参考文献の池田敏弘 1999b による瓦塔屋蓋部の関東地域の編年分類を用いた。

- 6 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構全測図…1/150、性格不明遺構…1/120、各遺構…原則 1/60 (ただし、一部に限り縮尺が異なる。)

- 7 遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、原則として同一図版、同一遺構の標高は統一し、Aポイントに表記した。なお、例外的に標高差が大きい場合は、統一せずその都度表記してある。

- 8 遺物実測図の縮尺は、鉄製品は1/2、土器、瓦塔は1/4、瓦は1/5である。ただし、一部においてはその限りではない。

- 9 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。

表現方法は、原則として須恵器のうち還元焼成の断面は黒塗り、須恵系土師質土器（酸化焼成）は土師質土器と表記し、断面は白抜きで、灰釉陶器以外の土師器等の土器、その他の遺物の断面は白抜きで表した。なお、瓦の断面は斜線（左下がり）で、瓦塔（屋蓋部）は斜線（右下がり）で表した。

それ以外の土器器面等の表現である釉薬は、炭化（煤・タール付着）はと適宜トーンで表した。

陶磁器については実測図に写真はめ込みで示している。

底部調整については、回転糸切りは  で表した。

- 10 遺物である碟のうち、敲打痕があるものは、「」がその範囲を、擦り痕があるものは「」でその範囲を示した。

- 11 挿図中の遺物番号は、遺物実測図及び遺物観察表の番号と一致している。

- 12 土層断面のうち一部は、平面図中の遺構を省略している場合がある。

- 13 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cm である。また、推定値・現存値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。

A…白色粒子、B…黒色粒子、C…赤色粒子、D…褐色粒子、E…赤褐色粒子、F…白色針状物質、

G…長石、H…石英、I…白雲母、J…黒雲母、K…角閃石、L…片岩、M…砂状、N…礫、O…金雲母

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2010 年版）に照らし最も近似した色相を示した。

目次

序	1 西別府廃寺について……………7
例言	2 調査の方法……………11
凡例	3 検出された遺構と遺物……………11
目次	IV 遺構と遺物……………12
I 発掘調査の概要……………1	1 土坑……………12
1 調査に至る経過……………1	2 ビット……………13
2 発掘調査・報告書作成の経過……………1	3 性格不明遺構……………22
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織……………2	4 遺構外出土遺物……………55
II 遺跡の立地と環境……………3	V 調査のまとめ……………61
III 遺跡の概要……………7	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図……………2	第23図 第1号性格不明遺構出土遺物(10)……………34
第2図 周辺遺跡分布図……………4	第24図 第1号性格不明遺構出土遺物(11)……………35
第3図 調査地点位置図……………8	第25図 第1号性格不明遺構出土遺物(12)……………36
第4図 調査箇所図……………9	第26図 第1号性格不明遺構出土遺物(13)……………37
第5図 第5次調査区全測図……………10	第27図 第1号性格不明遺構出土遺物(14)……………38
第6図 第1～4号土坑……………13	第28図 第1号性格不明遺構出土遺物(15)……………39
第7図 第3号土坑出土遺物……………13	第29図 第1号性格不明遺構出土遺物(16)……………40
第8図 第1～9、11～15号ビット(1)……………15	第30図 第1号性格不明遺構出土遺物(17)……………41
第9図 第10、16～19号ビット(1)……………19	第31図 第1号性格不明遺構出土遺物(18)……………42
第10図 第10、16～19号ビット(2)……………20	第32図 第1号性格不明遺構出土遺物(19)……………43
第11図 ビット出土遺物……………21	第33図 第1号性格不明遺構出土遺物(20)……………44
第12図 第1号性格不明遺構(1)……………23	第34図 第1号性格不明遺構出土遺物(21)……………45
第13図 第1号性格不明遺構(2)……………24	第35図 第1号性格不明遺構出土遺物(22)……………46
第14図 第1号性格不明遺構出土遺物(1)……………25	第36図 第1号性格不明遺構出土遺物(23)……………47
第15図 第1号性格不明遺構出土遺物(2)……………26	第37図 第1号性格不明遺構出土遺物(24)……………51
第16図 第1号性格不明遺構出土遺物(3)……………27	第38図 第1号性格不明遺構出土遺物(25)……………52
第17図 第1号性格不明遺構出土遺物(4)……………28	第39図 第1号性格不明遺構出土遺物(26)……………53
第18図 第1号性格不明遺構出土遺物(5)……………29	第40図 遺構外出土遺物(1)……………56
第19図 第1号性格不明遺構出土遺物(6)……………30	第41図 遺構外出土遺物(2)……………57
第20図 第1号性格不明遺構出土遺物(7)……………31	第42図 遺構外出土遺物(3)……………58
第21図 第1号性格不明遺構出土遺物(8)……………32	第43図 遺構外出土遺物(4)……………59
第22図 第1号性格不明遺構出土遺物(9)……………33	第44図 遺構外出土遺物(5)……………60

挿 表 目 次

第1表	第3号土坑出土遺物観察表	13	第9表	遺構外出土遺物観察表(1)	57
第2表	ピット出土遺物観察表	21	第10表	遺構外出土遺物観察表(2)	59
第3表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表(1)	24	第11表	遺構外出土遺物観察表(3)	61
第4表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表(2)	28	第12表	軒丸瓦分類表	64
第5表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表(3)	29	第13表	軒平瓦分類表	64
第6表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表(4)	29	第14表	丸瓦分類表	65
第7表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表(5)	47	第15表	平瓦分類表	65
第8表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表(6)	53			

図 版 目 次

図版1	調査区全景 (上空から)	第26図	105, 106, 107, 108, 109
	第1号性格不明遺構 (南東から)	第27図	110, 111, 112
	D・E-3グリッド周辺 (上空から)	図版7	第27図 114, 116, 117
	第1号性格不明遺構土層断面A-A'一部	第28図	119, 121, 122, 123
	第1号性格不明遺構土層断面E-E'一部	第29図	124, 126, 127
図版2	第16号ピット (南から)	図版8	第29図 128
	第17、18号ピット (南から)	第30図	129, 131, 132, 133, 135
	第19号ピット (南から)	第31図	137, 139, 140, 141
	第1号性格不明遺構 B-1グリッド付近	図版9	第32図 146, 147, 150, 153
	第1号性格不明遺構 遺物検出状況1	第33図	155, 156, 157, 159
	第1号性格不明遺構 遺物検出状況2	図版10	第34図 162, 163, 164
	第1号性格不明遺構 遺物検出状況3	第35図	165, 166, 167, 168, 171, 172, 173
	均整唐草文軒平瓦 検出状況1	図版11	第35図 169, 170
	均整唐草文軒平瓦 検出状況2	第36図	174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182
図版3	第14図 1, 5, 6, 8, 15, 16, 19, 20, 25, 27, 28	第37図	183
	第15図 34, 36, 37, 42, 46	図版12	第37図 184
	第16図 49 ~ 58, 59	第38図	185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203
図版4	第18図 68, 69, 70, 71, 72, 73	図版13	第39図 204, 205, 207, 208, 209
	第19図 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80	第42図	21, 23, 24, 26, 27, 29
	第20図 81	図版14	第43図 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37
図版5	第21図 82	第44図	39, 40 ~ 43, 44 ~ 48, 49, 50, 51, 52, 53
	第22図 83		調査箇所周辺 (上空から)
	第23図 84, 86, 87		
	第24図 90, 92, 94		
図版6	第24図 95		
	第25図 96, 101, 102		

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成28年5月26日付けで、社会福祉法人別府会から埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出の提出があった。開発の内容は事務所・多目的ホール増築工事で、面積339.29㎡であった。

熊谷市教育委員会は届出を受けて、同年6月17日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面下85～90cmの深度から奈良時代から平安時代にかけての土師器、瓦片などの埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を社会福祉法人別府会に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は埋蔵文化財に対する保護層が設けられない工法で行うものであり、計画の変更しない方針となったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

よって、熊谷市教育委員会では、熊谷市西別府官衙遺跡群調査会（以下、調査会）を設立し、発掘調査をその調査会が行うこととなった。

発掘調査は、調査会から、平成28年7月13日付け熊西発第2号で、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、平成28年7月19日から開始された。

なお、埼玉県教育委員会から調査会あてに、平成28年8月2日付け教生文第2-23号で発掘調査実施の指示通知があった。

遺物整理及び報告書刊行作業は、発掘調査終了後、平成29年4月3日から開始した。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成28年7月19日から平成28年9月7日にかけて行われた。調査面積は、339.29㎡であった。

まず、7月19日～27日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。この時期には珍しく、集中して大雨が続いたため、表土剥ぎに想定外の時間を要した。表土を剥ぎ終わったのち、28日から遺構確認作業を行った。その際、土坑、ピット、性格不明遺構などが確認され、順次遺構の調査に着手した。

この調査箇所は、既存の特別養護老人ホームの敷地内であること、夏季期間の発掘調査であったこと、さらに瓦や瓦塔片などの遺物が多量に確認されたことにより、図面実測作業は多忙を極め、作業の苦戦を強いられる結果となった。平成28年9月7日、調査のすべてを終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、平成29年4月3日から始めた。まず、遺物の洗浄・注記・復元を行い、その後11月までに順次、遺物の実測、拓本取りを行った。12月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、2月下旬には、原稿執筆、割付等の作業をし

て、報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月23日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

(1) 発掘調査

主体者 熊谷市西別府官衙遺跡群調査会

平成28年度

会長
副会長
事務局長
事務局次長
統括調査員
調査員
調査員
調査員
調査員
調査員
囑託職員

野原 晃
米澤ひろみ
山崎 実
森田 安彦
吉野 健
松田 哲
小島 洋一
藏持 俊輔
腰塚 博隆
山下 祐樹
山崎 和子

(2) 整理・報告書作成

主体者 熊谷市教育委員会

平成29年度

教育長
教育次長
社会教育課長
社会教育課担当副参事
社会教育課副課長兼文化財保護係長
主査
主査
主査
主査
主任
主任
主事
主事
主事
囑託職員

野原 晃
正田 知久
鶴田 敏男
吉野 健
新井 端
松田 哲
星 祥子
小島 洋一
藏持 俊輔
山下 祐樹
腰塚 博隆
武部 喜充
島村 範久
大野美知子
山崎 和子



第1図 埼玉県の地形図(西別府南寺 位置図)

II 遺跡の立地と環境

西別府廃寺は、熊谷市に所在し、JR 高崎線籠原駅の北約 2 km、荒川から北へ約 6 km、利根川から南へ約 5 km に位置する。市の南には荒川が、北には利根川がそれぞれ西から南東方向に流れ、両河川が最も近接する地域にある。熊谷市は西側に柳挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地及び比企丘陵、北側、東側には妻沼低地が広がり、本市の大半はこの妻沼低地上に位置している。

柳挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町末野付近を扇頂として東は市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは本報告である西別府付近まで延びており、妻沼低地に向かって緩やかに下る。また、扇状地扇端である三ヶ尻地区や西別府地区の台地裾周辺部においては、扇状部で伏流水となっていた水が湧水となって出現し、かつては多数確認されていた。

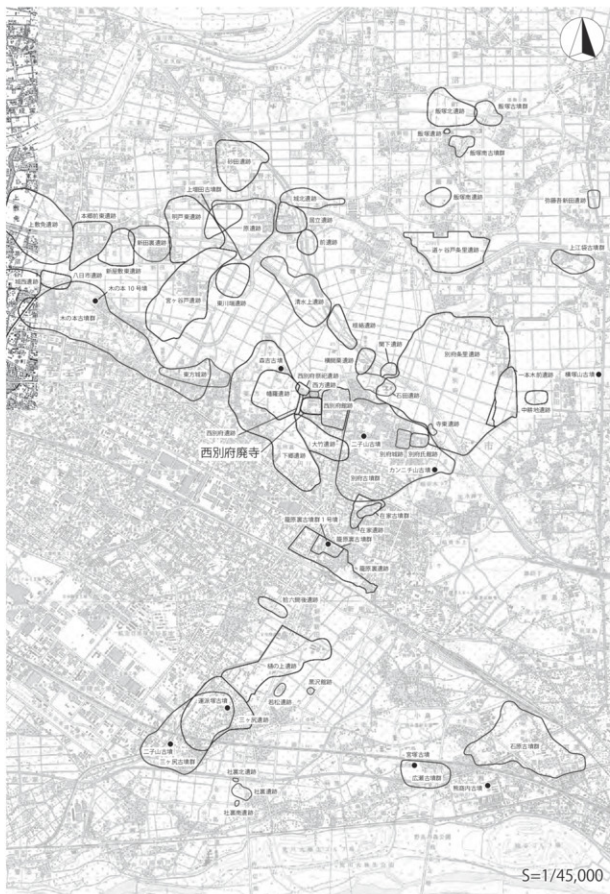
一方、柳挽台地の東側では、洪積世に荒川の洪水により新たに形成された荒川新扇状地が広がっている。この荒川新扇状地は、熊谷市に隣接する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が確認できる。

今回報告する、西別府廃寺は、柳挽台地北東端縁辺部の標高 28 ～ 33 m を測る台地上に所在する。

次に、本遺跡を中心に柳挽台地及び妻沼低地における歴史環境の一端を簡単に見ていきたいと思う。まず、縄文時代であるが、早期段階では熊谷市に隣接する深谷市東方城跡において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず、低地にも出現し始め、中期も特に後半段階の加曾利 E 式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として台地直下の低地上に集中している。後期になると徐々に低地への進出が顕著になり、西城切通遺跡、場違ヶ谷戸遺跡など、柳挽台地から離れた低地上にも遺跡が確認できるようになる。晩期では遺跡数が減少し、市東部の諏訪木遺跡は後期に続いて集落が確認できた唯一の事例である。調査において、遺構により、大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。

弥生時代に入ると、初期段階である前期末から中期前半において藤之宮遺跡で土器片が検出されている。遺構として確認できた遺跡は柳挽台地直下の低地に集中しているが、集落ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡では前期末から中期前半の再葬墓が 13 基確認され、このほかにも、飯塚遺跡、飯塚南遺跡や深谷市の上敷免遺跡などでも再葬墓が確認されている。中期中頃になるとこれまでの状況は一変して、集落跡の展開が増す。東日本でも最古の段階の環濠集落と考えられる池上遺跡や、その墓域される方形周溝墓が検出された行田市の小敷田遺跡などがあり、集落としての展開が本格的に始まる。中期後半は前中西遺跡、諏訪木遺跡、北島遺跡で集落が営まれており、前中西、諏訪木、藤之宮遺跡では方形周溝墓も検出されている。北島遺跡では、大規模な集落展開と墓域の形成のほかに、特筆すべきこととして、水田に引き込む水路や堰が造営されていたことが挙げられる。このことは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っている。後期になると初頭については藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が確認された事例は前中西遺跡、北島遺跡以外に周辺での確認事例はない。

古墳時代に入ると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地ばかりでなく低地帯の自然堤防上にも営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期では、妻沼低地に大きく遺



第2図 周辺遺跡分布図

跡が展開している。横間渠遺跡・別府条里遺跡・一本木前遺跡・中耕地遺跡・北島遺跡・弥藤吾新田遺跡等がある。横間渠遺跡では住居跡が3軒、北島遺跡では21軒検出されており、北島遺跡さらに弥藤吾新田遺跡等は比較的大規模な集落と推定されている。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。北島遺跡・中条遺跡内の権現山遺跡・常光院東遺跡等で遺構・遺物が検出されている。北島遺跡では住居跡から須恵器の器を模倣した土師器小型壺が、権現山遺跡では出現期の竈をもつ住居跡が検出されている。また、集落内の祭祀は東川端遺跡に確認されていて、遺物が集中分布している谷にむかう斜面部で剣形の滑石製模造品が検出されている。また、古墳に目を向けると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防に横塚山古墳が存在する。

そして、後期になると遺跡は爆発的な増加をみる。台地ばかりではなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようである。集落は、古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが市内では目立つようになる。柳挽台地及び荒川新扇状地上では、極の上遺跡で古墳時代後期から平安時代の住居跡が150軒以上検出され、このうち古墳時代後期のものは14軒以上に上る。また、現在では同遺跡の一部となっている上辻・下辻遺跡でも後期から平安時代の住居跡が50軒以上検出された。三ヶ尻遺跡内の天王遺跡等でも後期の集落が検出されている。一方、妻沼低地の自然堤防上では、一本木前遺跡・飯塚南遺跡・北島遺跡・小敷田遺跡等が存在する。一本木前遺跡では後期を中心に奈良・平安時代の住居跡が450軒以上検出されており、当該期の祭祀跡も発見され、折り重なるように土師器杯等が出土し、それとともに白玉も出土している。

一方、古墳を見てみると、群を形成して築造されているのがわかる。柳挽台地上の別府古墳群・在家古墳群・龍原裏古墳群・三ヶ尻古墳群、荒川新扇状地の玉井古墳群・広瀬古墳群・石原古墳群等が分布する。これらは概ね6世紀から7世紀ないしは8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。別府古墳群は、農夫の埴輪を出土している。龍原裏古墳群は川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、7世紀後半～8世紀初頭の築造と考えられる八角形の埴形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相において見逃すことのできない発見である。三ヶ尻古墳群は、前方後円墳の二子山古墳を盟主墳とし、かつて100基以上の古墳で形成されていた大古墳群であるが、現在でも61基の所在が確認されている（消滅・半壊を含める）。また、広瀬古墳群中の宮塚古墳は、上円下方墳という特異な埴形を今に残す国指定史跡として知られている。

古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、増減はするもの奈良・平安時代へと継続されていく。このころの中心的集落遺跡は妻沼低地の北島遺跡にみられる。300軒以上もの住居跡が検出されている大規模集落である。7世紀から9世紀を中心に12世紀、さらには中世にまで及ぶ集落であり、大規模な掘立柱建物跡・道路状遺構・河川跡等の遺構と遺物が検出されている。また、9世紀前半には二重の溝で区画され、区画内に大型の掘立柱建物跡と少数の堅穴住居跡で構成される個所が登場している。この区画施設は、10世紀前半には位置を変え、11世紀前半には消滅する。このことから、北島遺跡は地域の中核となる典型的律令集落であろうと推定される。

さらには、7世紀末から8世紀初頭頃の出芽木簡を出土した小敷田遺跡、整然と配された9世紀代の掘立柱建物跡群が検出された池上遺跡も存在する。また、隣接する諏訪木遺跡では、古墳時代後期から

平安時代にかけての祭祀が行われた河川跡が検出され、玉類、被熱した銅鏡、さらには斎串・人形等の木製祭祀具を使った水辺の祭祀が行われていたことが確認されたほか、平安時代の溝に区画された集落跡や大型の掘立柱建物跡群、多数の灰釉陶器や緑釉陶器が検出されるなど官衙の様相が看取でき、西別府祭祀遺跡と同様に注目すべき遺跡である。

そして、集落以外の遺跡では、櫛挽台地北東端には本遺跡に隣接して深谷市幡羅官衙遺跡が所在する。この幡羅官衙遺跡は東西 500 m、南北 400 m の範囲をもつ幡羅郡家跡であり、これまでに郡庁を除く正倉院、館、厨家、曹司、道路等の施設が検出され、7 世紀後半に小規模な倉庫などの掘立柱建物が建てられ、7 世紀末には主要な施設が整えられていったようである。そして、8 世紀末には正倉の掘立柱建物から礎石建物への建て替えや敷地の拡張などが行われ、9 世紀前半へ中葉には二重溝と土塁による区画施設が造られ郡家の様相も大きく変化する。この施設は、10 世紀前半または中頃の正倉院の廃絶後の 11 世紀前半まで存続していたとされ、これが郡家の終焉と考えられている。また、この幡羅官衙遺跡の周辺には、本報告の西別府廃寺以外に、西別府遺跡、西別府祭祀遺跡が所在し、郡家との関連で注目されおり、平成 30 年 2 月にはこの内の、幡羅官衙遺跡と西別府祭祀遺跡が国指定史跡に指定されている。西別府遺跡は、幡羅官衙遺跡と一体の遺跡と捉えることができ、幡羅官衙遺跡と同様な 9 世紀後半から 11 世紀前半まで存在していたと考えられる二重溝と土塁による区画施設が確認され、幡羅郡家の機能の一部を担っていたと考えられている。西別府廃寺は、郡司が創建に関わったとされる県内でも古い 8 世紀初頭創建の寺院であり、基壇建物跡、寺城を区画する溝跡、瓦溜り状遺構などが検出され、多数出土している軒丸瓦や軒平瓦などから 9 世紀後半まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、7 世紀後半から 11 世紀前半まで湧泉で行われた水辺の祭祀跡であり、馬形・横櫛形・有孔円板形・有線円板形等の石製模造品をはじめ、墨書土器等の土器が多数検出されており、祭祀具や場所を時代とともに変えて祭祀が継続的に行われていたと考えられる。また、この西別府祭祀遺跡の北西の妻沼低地上の本郷東遺跡・新屋敷東遺跡では、河川跡の縁辺部で 7 世紀前半の土器と共存する櫛形・剣形・有孔円板形・有線円板形石製模造品が出土し、集落内の祭祀跡においても、櫛形・有線円板形・有孔円板形・勾玉形・剣形の石製模造品が出土しており、水利にかかわる再生を祈願した水の祭祀と理解され、西別府祭祀遺跡へと続く祭祀の前段階の時期のものとして注目される。なお、西別府遺跡は、幡羅官衙遺跡、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡に挟まれる遺跡であり、この遺跡の未発掘部分に郡家の郡庁が存在するのではないかと注目されている。

さらに、これらの遺跡が所在する台地下の低地には、同郡に属する別府条里遺跡が所在し、条里制に関わる遺構の痕跡をとどめている。条里跡の存在については、埼玉郡に属する市内東部の中条条里遺跡、行田市小敷田条里遺跡、南河原条里遺跡、大里郡に属する市内南東部の大里条里遺跡等が所在する。一方、男倉郡に属する江南台地には 8 世紀前半に創建された寺内廃寺が所在する。本格的伽藍が確認され、瓦のほか、「花寺」「石井寺」「東院」等の寺の名称や施設に関連する墨書土器、塑像破片、鉄釘等の金属製品が出土し、最盛期は 9 世紀後半と考えられている。同じく江南台地の東端には、生産遺跡として目白坂瓦窯跡が所在する。瀬戸山古墳群の盟主墳と考えられる前方後円墳伊勢山古墳の調査時に発見されたが、現在のところ本窯製瓦の供給先は不明である。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が点在するようになる。別府城

跡・別府氏館跡・西別府館跡・玉井陣屋跡・奈良氏館跡・黒沢館跡・兵部裏屋敷等であるが、いずれの館跡も実態は不明である。その中で残りの良いものの中に、本遺跡の北西に位置する別府城跡がある。これは、別府氏の居館で方形の敷地に土塁の一部と空堀をよく残している。また、三ヶ尻地区に所在する黒沢館跡は、発掘調査によって、渡辺半山が記した『訪瓊録』に残る「黒沢屋敷」の記載と調査成果が合致した貴重な例である。その北側に所在する樋の上遺跡でも、15～16世紀の土坑・集石遺構とともに比較的深くコーナーをもつ溝跡が検出されており、館跡の一部である可能性が考えられている。なお、中世以降の歴史的事態はまだまだ情報不足で、今後の調査成果によるところが多く、情報の蓄積に期待するところであろう。

Ⅲ 遺跡の概要

1 西別府廃寺について

西別府廃寺は、遺跡が所在する中心部は以前、鬱蒼と茂った林で、古くから古代瓦や瓦塔破片が多く採集されており、寺院跡や窯跡の可能性が指摘されていた。それらの採集された瓦や瓦塔は、昭和30年(1955)に古瓦として市指定文化財に指定された。しかし、それ以後の現地踏査の際には瓦が発見されておらず、寺院の規模や年代等の詳細は不明のままであった。その後、平成2年(1990)及び平成4年(1992)、民間開発に伴って発掘調査を実施することとなり、これにより寺院跡との確証及びその実態が徐々に明らかなものとなった。また、遺跡の実態を正確に把握し、その価値を遺跡保護に活用するための情報収集を目的とし、平成21年度は西別府遺跡・西別府廃寺確認調査(第3次調査)、平成22年度は西別府遺跡・西別府廃寺確認調査(第4次調査)を行った。この第3、4次調査は調査の大部分が西別府遺跡であり、西別府廃寺の調査範囲は一部のみであった。

この遺跡の周辺の西別府遺跡、西別府祭祀遺跡、隣接する幡羅官衙遺跡と本遺跡を合わせた幡羅官衙遺跡群は、幡羅郡家と、それに付随する施設としての寺院と祭祀場と、3つの要素を備えた全国的に見ても貴重な遺跡群である。よって、本遺跡は郡家の郡寺としての機能を有していたと考えられる。

過去4回にわたる調査で検出された主な遺構は、寺域を囲み、外界との区画として考えられる溝跡が1条、寺域内の伽藍想定域を区画分けしたであろう区画溝跡が2条、版築工法による基壇跡と考えられる建物跡、それ以外に6棟の建物跡が確認された。建物跡のうち2棟は、作業場の建物としての機能を備えていたことが確認でき、寺院の建築や補修などの製品を生産していた可能性が考えられる。

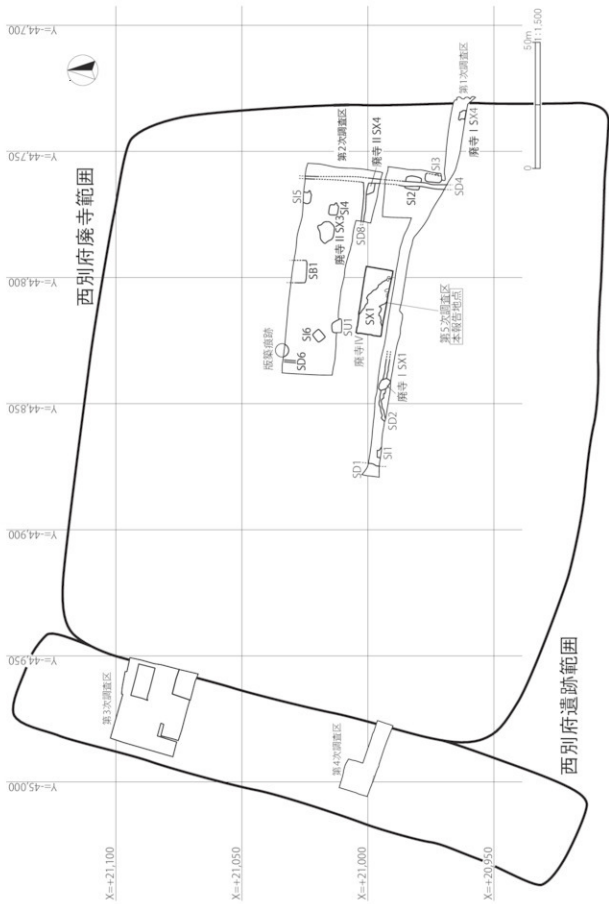
区画溝跡は伽藍の周囲を囲む回廊を意識しての配置が考えられ、伽藍配置は基壇跡と考えられる建物跡が「塔」、その西方30mに建物版築地業跡があり、これが金堂と推定される。そのことからこの西別府廃寺の伽藍配置は法起寺式と推定される。

さて、今回の発掘調査後の平成29年度には幡羅官衙遺跡群の西別府祭祀遺跡と深谷市の幡羅官衙遺跡が国史跡に指定された。これは郡家の全体像が把握できるとともに、付随する祭祀場も含め、その成立から廃絶に至るまでの過程が確認できる稀有な遺跡であることが指定理由となっている。

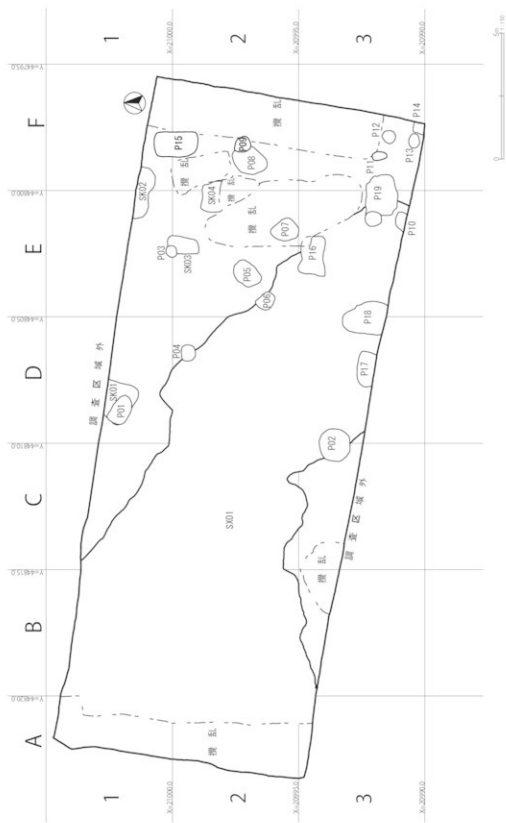
そのことから、指定された遺跡とともに、本遺跡も地方官衙を知る上で重要な遺跡である。



第3図 調査地点位置図



第4図 調査箇所図



第5圖 第5次調查區全測圖

2 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をA-1として東へA・B・C・・・、南へ1・2・3・・・とし、Aラインは北から南へA-1・A-2・A-3・・・と呼称した。Bライン以西もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、先述のグリッド設定を行った。なお、座標は世界測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。

その後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として、遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごと一括して慎重に取り上げた。遺構は、写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

今回の発掘調査は夏季期間での調査であったため、炎天下の過酷な環境のなかの作業となったが、無事に調査を終えることができた。また、検出された遺物の出土量が非常に多く、その多くが一定の範囲からの検出となったため、実測図の作成、写真撮影と繰り返しの作業であったため、非常に複雑な作業となった。

3 検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、土坑4基、性格不明遺構1基、ピット（大規模掘立柱建物跡と推定できる柱穴含）が19基であった。調査区のほぼ70%が性格不明遺構である溝状の大きな掘り込みである。この遺構から今回の調査で出土した遺物の大部分が検出されており、推測の域を出ないが、寺院廃絶に伴う不用瓦等の「廃棄遺構」の可能性が高い遺構である。

また、その性格不明遺構に切られる形で柱穴と思われるピット群が確認されている。位置からすると伽藍の中門を考えることができるが、検出したのが3基であることから、正確なことは不明である。

遺物については、出土した多くが寺院に関連する瓦類である。総計4,300枚（破片も含）の瓦が検出され、種類別に見ると、軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦などが確認できた。特に、均整唐草文軒平瓦の完形（重量約8kg）が2点検出された。

また、寺院の関連遺物として瓦塔片も多数確認された。屋蓋部が鮮明に分かるものや、軸部の四方、外周を囲むものなどが検出された。なお、過去の調査同様、瓦堂と推定できる屋蓋部も確認された。還元焙焼成や酸化焙焼成のものが検出されていることから、時期としては長い期間であり、8世紀初頭の寺院創建時から9世紀前半の寺院廃絶期に近いものが確認された。

一方、土器は大体が土師器の坏や甕などであり、寺院の時期に符合するものが大半であった。

検出した遺物量は、コンテナ（大きさ：縦40cm、横60cm、深さ14cm）にして43箱であり、その9割が瓦であった。

IV 遺構と遺物

1 土坑

土坑は全部で4基が確認された。第1、2、4号土坑はいずれも完形での検出はされず、第3、4号土坑は確認面からの掘り方が非常に浅いものであった。

以下、各土坑ごとに詳細を記載する。

第1号土坑（第6図）

D-1グリッドから検出した。第1号ピットと重複しており、第1号ピットに一部切られている。本調査区の北壁に接し、調査区域外にその一部があることと推測でき、詳細は不明であるが、平面プランについては、楕円形または隅丸方形を呈するものであろう。

規模は長軸1.67m～1.50m程度を測り、深さは断面観察から0.48mである。立ち上がりはやや傾斜し、底部は平坦である。用途は不明であり、断面観察から自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は微細な土器片のみで、時期を判別できるものは確認できなかった。

第2号土坑（第6図）

E・F-1グリッドから検出した。他の遺構とは重複関係にはないが、北壁の調査区域外に位置しているため全容は不明である。しかし、検出された一部から判断し、平面プランは東西に長い不整形な方形を呈するものと推測できる。

規模は長軸2.80m程度を測り、深さは断面観察から0.35～0.40mである。掘り方は逆台形状で、底部は第1号土坑同様、平坦である。その用途は不明であり、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は微細な土器片のみで、時期を判別できるものは確認できなかった。

第3号土坑（第6図・第1表）

E-1・2グリッドから検出した。第3号ピットと重複しており、第3号ピットに一部切られている。平面プランについては、やや台形状の方形を呈するものであろう。

規模は長軸が1.24m、短軸が0.68mを測る、深さは0.12mであり、非常に浅い。掘り込みは深さが浅いため詳細は不明だが、緩やかな掘り込みであると判断できる。遺構確認面より上部に堆積がある際の掘り込みと思われるが、その用途は不明であり、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は土器片が数点と瓦片が1点検出された。瓦は、凸面が斜格子叩きの平瓦であった。

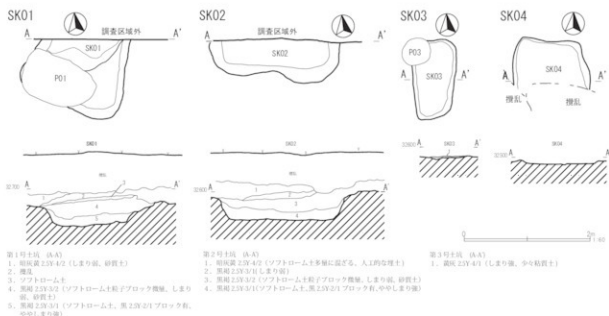
第4号土坑（第6図）

E・F-2グリッドから検出した。攪乱を多く受けており、大半が消滅していた。

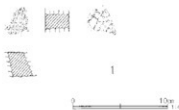
残存部からの判断から平面プランについては、南北に長い不整形な方形を呈するものであろう。

規模は長軸が1.25 m、短軸が0.78 mを測る。深さは0.10 mであり、浅い。掘り方は深さが浅いため詳細は不明だが緩やかな掘り込みであると判断できる。遺構確認面より上部に堆積がある際の掘り込みと思われるが、その用途は不明であり、断面から自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は検出されなかった。



第6図 第1～4号土坑



第1表 第3号土坑出土遺物観察表 (第7図)

出土遺構	No.	器種	法量 (cm)	手法の特徴等	布目 (本/㎡)	胎土	色相	構成	残存率	備考
SK03	1	平瓦	厚さ 2.4～2.5	凸面・斜格子印き	—	ADN	凸面: 灰黄褐 10YR-4/2 凸面: にない黄褐 10YR-5/3	C	破片	

2 ビット

ビットは、19基検出し、これらビットのうち第15～19号ビットは柱穴と判断できるものであった。しかし、柱穴として判断はできるが、残念ながらその柱の並びが不明なため、ビットとして括り掲載する。なお、第16～19号ビットは第1号性格不明遺構と重複関係にあった。

ここでは通常のビットと柱穴と判断できるものを分けて記載することとする。

以下、ビット及び柱穴ごとに詳細を記載する。

(1) ビット

第1号ビット (第8図)

D-1グリッドから検出した。第1号土坑と重複関係にあり第1号土坑を切っていた。

平面プランについては、やや東西に長い不整形な楕円形を呈するものである。

規模は長軸が1.20 m、短軸が0.76 mを測る。深さは0.48～0.52 mであり、第1号土坑の2倍の深さであり、やや西の掘り込みが深い。掘り方は箱状で、ほぼ直角である。その用途は不明であり、断面観察からの判断はできなかったが、自然堆積により埋まったものと推測される。出土遺物は、検出されなかった。

第2号ビット (第8図)

C・D-3グリッドから検出した。第1号性格不明遺構と重複関係にあり、第1号性格不明遺構を切っていた。

平面プランは、円形を呈するものである。

規模は径1.25～1.35 mを測り、長軸、短軸ともにほぼ同一であり、深さは第1号性格不明遺構の床面から0.35 mの深さである。掘り方は、ほぼ直角である。その用途は、不明である。埋土は、第2～4層すべてにおいて大きささまざまな礫が確認でき、比較的多くみられた。周辺の土層からはそのような礫層は確認できていないため、人工堆積と判断できる。出土遺物は、検出されなかった。

第3号ビット (第8・11図)

E-1・2グリッドから検出した。第3号土坑と重複関係にあり、第3号土坑を切っていた。

平面プランは、円形を呈するものである。

規模は径0.42～0.48 mを測り、長軸、短軸ともにほぼ同一で、深さは0.12 mである。掘り方は浅く、丸みをもつ断面形を呈する。用途は、不明である。

出土遺物は、遺構の中央から瓦片が1点検出され、凸面が縄叩き後にナデ調整の丸瓦であった。

第4号ビット (第8図)

D-2グリッドから検出した。第1号性格不明遺構と重複関係にあり、第1号性格不明遺構を掘り込んでいた。

平面プランは、ほぼ円形を呈するものである。

規模は、長軸が0.65 m、短軸が0.56 mを測り、深さは0.15 mである。掘り方は浅く、東側に一段やや深い掘り込みをもつ。その用途は、不明である。出土遺物は、検出されなかった。

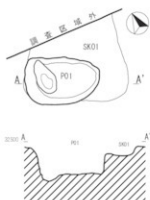
第5号ビット (第8・11図)

E-2グリッドから検出した。他の遺構との重複関係はない。

平面プランは、楕円形を呈するものである。

規模は、長軸1.22 m、短軸0.40 mを測り、深さは0.12 mである。掘り方は浅く、緩やかな船底状

P01



- 第2号ビット (A-A')
 1. 基層2SV-3/2 (砂質)
 2. 基層2SV-3/1 (砂質, しまり層, ソフトローラム土
 プラトー状)
 3. 基層2SV-3/1 (中粒土質), 少り礫状)
 4. 相成層2SV-4/2 (ソフトローラム土粒子少量, 礫大く多量)

- 第3号ビット (A-A')
 1. 基層2SV-3/1 (砂質, しまり層)

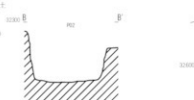
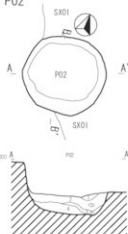
- 第4号ビット (A-A')
 1. 基層2SV-3/1 (ソフトローラム土少量, しまり層)

- 第5号ビット (A-A') (他B')

- 第6号ビット (A-A')

1. オリアープ層2SV-4/3 (ソフトローラム土粒子多量)
 2. 基層2SV-3/1 (しまり層, ソフトローラム土粒子多量)
 3. 基層2SV-3/1 (中粒土質, ソフトローラム土粒子多量)

P02

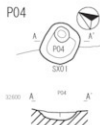
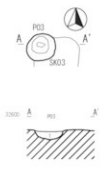


- 第7号ビット (A-A')
 1. 基層2SV-3/1 (中粒土質, ソフトローラム土粒子多量)

- 第8号ビット (A-A')

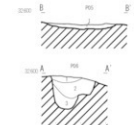
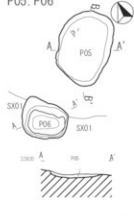
1. 基層2SV-3/1 (しまり層, ソフトローラム土粒子及びブロック多量に占)

P03

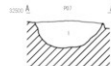
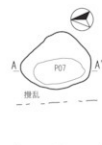


- 第11号ビット (A-A')
 1. 基層2SV-3/1 (ソフトローラム土粒子及びブロック多量に占)
 2. 相成層2SV-4/2 (ソフトローラム土ブロック状, しまり層)
 3. オリアープ層2SV-3/1 (ソフトローラム土ブロック状, しまり層)
 4. 基層2SV-3/1 (砂質土)
 5. 基層2SV-3/2 (ソフトローラム土多く混在)
 6. 相成層2SV-4/3 (多量ソフトローラム土混在)
 7. 相成層2SV-3/2 (砂質土, しまり層)

P05, P06



P07

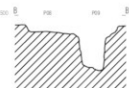
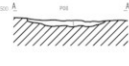
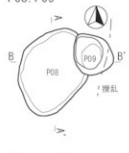


- 第12号ビット (他B')
 1. 相成層2SV-4/2 (腐化物, しまり層)

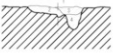
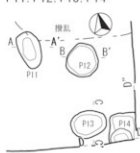
- 第13号ビット (C-C')
 1. 相成層2SV-4/2 (腐化物, しまり層)

- 第14号ビット (D-D')
 1. 基層2SV-3/1 (ソフトローラム土粒子及びブロック多量に占)
 2. 基層2SV-3/1 (中粒土質, ソフトローラム土多量)
 3. オリアープ層2SV-3/1 (砂質土, しまり層)
 4. オリアープ層2SV-3/1 (一連ソフトローラム土少量, 中粒土質)

P08, P09



P11, P12, P13, P14



P15



第8図 第1～9、11～15号ビット (1)

を呈する。その用途は、不明である。

出土遺物は、瓦片が1点検出された。瓦は、凹面に布目痕、横骨痕、凸面に縄叩き後一部ナデの粘土紐造りの平瓦であった。

第6号ピット（第8図）

E-2グリッドから検出した。第1号性格不明遺構と重複関係にあり、第1号性格不明遺構を切っていた。

平面プランは、隅丸方形を呈するものである。

規模は、長軸0.72 m、短軸0.58 mを測り、深さは0.45 mである。掘り方は西側が深い逆凸形状の断面形を呈する。その用途は不明であり、土層観察から自然堆積と考えられる。出土遺物は、確認できなかった。

第7号ピット（第8・11図）

E-2グリッドから検出した。遺構との重複関係はないが、近世の攪乱か所にこのピットが掘り込まれている。

平面プランは、不整形な楕円形を呈するものである。

規模は長軸1.12 m、短軸0.98 mを測り、深さは0.41 mである。掘り方は、丸みをもつ船形の断面形を呈する。その用途は、不明である。近世の攪乱か所にあることから、この遺構は近世以降に造られたものと推測される。出土遺物は、確認できなかった。

第8号ピット（第8図）

F-2グリッドから検出した。第9号ピットと重複関係にあり、第9号ピットの一部を切られていた。

平面プランは、不整形な楕円形を呈するものである。

規模は、第9号ピットに切られているため、詳細は不明であるが、推定長軸1.38 m、短軸1.05 mを測り、深さは0.12 mである。掘り方は浅い。出土遺物は、確認できなかった。

第9号ピット（第8図）

F-2グリッドから検出した。第8号ピットと重複関係にあり、第8号ピットの一部を切っていた。また一部が近世の攪乱か所に接していた。

平面プランは、円形を呈するものである。

規模は、長軸0.70 m、短軸0.60 mを測り、深さは0.50 mである。掘り方は柱穴と推定されるものであった。近世の攪乱か所にあることから、この遺構は近世以降造られたものと推定される。出土遺物は、確認できなかった。

第10号ピット（第9図）

E-3グリッドから検出した。第1号性格不明遺構との重複関係にあり、第1号性格不明遺構によって完全に切られている。また、このピットは調査区の南壁に位置し、その一部は調査区域外であること

から全様は不明である。

平面プランは、残存部から楕円形を呈するものと推定される。

規模は、径0.60 mを測り、深さは断面観察から0.32 mである。掘り方は柱穴と推定されるものであったが、断面観察から、第1号性格不明遺構と一体で、第1号性格不明遺構とともに自然堆積により埋まったと推定される。出土遺物は、確認できなかった。

第11号ピット（第8図）

F-3グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはないが、近世の攪乱か所と接しており、一部それを掘り込んでいた。

平面プランは、南北に長い楕円形を呈するものである。

規模は、長軸で0.60 m、短軸で0.33 mを測り、深さは0.48 mである。掘り方は柱穴と推定されるものであり、断面観察からもそれが分かる。しかし、このピットは隣接する攪乱か所を掘り込んでいることから、近世のものと判断し、今回は通常のピットとして扱った。出土遺物は、確認できなかった。

第12号ピット（第8図）

F-3グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。

平面プランは、円形を呈するものである。

規模は、径0.50～0.53 mを測り、深さは0.08 mである。掘り方は浅いものである。出土遺物は、確認できなかった。

第13号ピット（第8図）

F-3グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。

平面プランは、東西に長い楕円形を呈するものである。

規模は、長軸で0.57 m、短軸で0.45 mを測り、深さは0.11 mである。第12号ピット同様に掘り方は浅いものである。出土遺物は、確認できなかった。

第14号ピット（第8図）

F-3グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはないが、一部が調査区域外にあり詳細は不明である。

平面プランは、南北に長い方形を呈するものである。

規模は、残存長軸で0.47 m、残存短軸で0.44 mを測り、深さは断面観察から最大0.33 mである。掘り方は一段浅く掘り込んだもの（深さ0.12 m）であり、南側はさらにピット状に掘り込まれていた（深さ0.33 m）。柱穴としての性格も考えることができるが、周辺に同様のピットがないことから通常のピットとして扱った。出土遺物は、確認できなかった。

(2) 柱穴

第15号ピット（第8・11図、第2表）

F-1・2グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはないが、東側がわずかに近世の攪乱か所と接する。

平面プランは、南北に長い方形を呈するものである。

規模は、長軸で1.72 m、短軸で1.02 mを測り、深さは1.08 mであり、長軸短軸ともに規模が大きく、深いものであった。掘り方は逆台形状の断面を呈し、東側はやや緩やかな65°の角度、西側は鋭角な85°の角度であり、西側に最深部をもつものであった。埋土は、礫土による人工堆積であったため、断面観察が困難であった。

出土遺物は、数点検出され、中世以降の磁器碗2点及び、8世紀後半～9世紀前半の古代瓦片4点であった。瓦のうち1点は、凸面にナデ痕のある丸瓦で、残り3点が平瓦で、凸面にナデ痕のあるものと、平行叩き目痕のあるものであった。

第16号ピット（第9・10・11図、第2表）

E-3グリッドから検出した。遺構の大部分が第1号性格不明遺構内に位置し、同遺構に切られていた。また、一部攪乱を受けていた。

平面プランは、東西に長い方形を呈する。

規模は、長軸1.50 m、短軸0.82 mを測り、深さは0.95 mである。掘り方は方形の掘り込みの中央やや西寄りに楕円形の掘り込みがあるものであった。土層断面観察からは柱痕を確認することはできなかったが、平面プランから柱穴であることが推定された。覆土から自然堆積により東西から埋まったようである。

出土遺物は、ピットの上面に数点検出したが、第1号性格不明遺構の遺物であると判断された。

第17号ピット（第9・10・11図、第2表）

D-3グリッドから検出した。第1号性格不明遺構内に位置し、同遺構に切られていた。一部が調査区の南壁の調査区域外にあるため、詳細は不明である。

平面プランは、残存部から判断し、東西に長い方形を呈するものである。

規模は、長軸1.40 m、検出短軸長0.72 mを測り、土層断面から最大の深さは0.75 mである。掘り方は方形の掘り込み内に東西に2箇所楕円形の掘り込み（西側：長さ0.57 m、深さ0.63 m、東側：検出長さ0.74、深さ0.58 m）があるものであった。

2箇所の掘り込みは柱穴痕であると考えられ、それぞれ別の時期に掘られたものであることが土層断面観察からもわかる。西側が先に掘られ、その後東側が掘られたようである。2箇所のうち西側は土層断面観察から柱痕が確認でき、その径は、直径15 cm以上であった。最大深度は、断面観察から80 cm以上はあったものと推定される。土層断面観察から、西側の柱を抜き取り、埋め戻した後に東側の柱穴を造ったものと推定され、その東側の柱穴は自然堆積であった。

なお、西側の柱穴は底部に灰白色の粘質土が堆積していた。

第18号ピット (G-C区)

1. 黒土層 (中砂質, しまり強)
2. オリーブ黒土層 (中砂質, しまり強, ハード・ソフトローム土粒子・プロック状)
3. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子・プロック状)
4. 灰土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子・プロック状)
5. 黒土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子・プロック状)
6. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ハード・ソフトローム土粒子・プロック状)

第19号ピット (第1号性格不明遺構 西側)

1. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
2. オリーブ黒土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
3. オリーブ黒土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
4. オリーブ黒土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
5. 黒土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
6. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
7. 黒土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
8. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ハードローム土粒子)

9. 黒泥土層 (粘質, しまり強)

10. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
11. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
12. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
13. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
14. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)
15. 黒泥土層 (粘質, しまり強, ソフトローム土粒子)

第10図 第10、16～19号ピット (2)

出土遺物は、ピット、上面で数点確認できたが、第1号性格不明遺構の遺物であると判断した。

第18号ピット (第9・10図)

D・E-3グリッドから検出した。第1号性格不明遺構内に位置し、一部が調査区南壁の調査区域外にあるため、詳細は不明である。

平面プランは、残存部から判断し、南北に長い楕円形を呈するものである。

規模は、検出長軸で1.70 m、短軸が1.41 mを測り、最大の深さは土層断面から0.33 mと推定される。掘り方は楕円形の掘り込み内に東西に2箇所の楕円形の掘り込み(西側:長さ0.42 m、深さ0.40 m、東側:長さ0.71 m、深さ0.55 m)があるものであった。

2箇所の掘り込みは、それぞれ別の時期に掘られたものであることが推定された。土層断面観察判断が出来なかったため、新旧については不明である。

土層断面観察から自然堆積と考えられる。また、第1号性格不明遺構と一体のもと考えられ、柱穴と考えるには乏しい状況である。

なお、2箇所のうち東側の底部には灰白色の粘質土が堆積していた。

出土遺物は、ピット上面から数点確認できたが、第1号性格不明遺構の遺物であると判断した。

第19号ピット (第9・10図)

E・F-3グリッドから検出した。第1号性格不明遺構の縁辺部に位置し、その一部を同遺構に切られていた。

平面プランは、残存部から判断し、東西に長い方形を呈するものである。

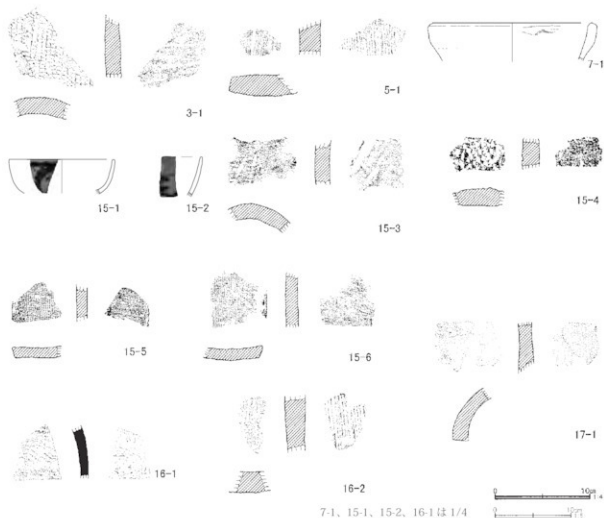
規模は、残存長軸で1.70 m、短軸が1.30 mを測り、最大の深さは遺構確認面から1.00 mである。掘り方は東西に長い方形の掘り込みの西に南北に長い方形の落ち込みがあり、その南北に長い掘り込みの北側がさらに0.10 mの深さで円形に掘られていた。土層断面観察から東西軸の方形の掘り込みは15～20 cm程度の深さであり、南北軸の掘り込みはさらに60 cmの深さで掘り込まれていた。

西側のピット状の掘り込みの規模は、径0.62 mを測り、深さは遺構確認面から1.15 mである。東側の方形の掘り込みを切っているようであった。

東西2箇所の掘り込みは、柱穴であると考えられ、新旧関係にあると推定される。土層断面観察による判断が出来なかったが、西側のものが新しいと考えられる。

土層断面観察から、東からの自然堆積により埋まっていったものと考えられる。

出土遺物は、ピットの上面から数点確認できたが、第1号性格不明遺構の遺物であると判断した。



第 11 図 ビット出土遺物

第 2 表 ビット出土遺物観察表

出土遺物 No.	器種	法量 (cm)	器高	胎土	色調	焼成	手法、形態の特徴等	残存率	備考
P03	1 丸瓦	厚さ 1.6 ~ 2.2		ABD	灰 7 SY-5/1	B	凸面：縞叩き後一部ナデ有 凹面：縞位ナデ	鉄線部付近	—
P05	1 平瓦	厚さ 2.4 ~ 2.8		ADN	橙 7 SYR-6/6	B	凹面：布目縞、縞青縞 凸面：縞叩き後後一部ナデ、糸切り底粘土絶造り	破片	布目(本/凹) 7 × 8
P07	1 土師器 器種不明	(18.0)	(4.0)	ABC1	にぶい橙 7 SYR-6/3	B	口縁部周辺スチ着	口縁部 10%	—
P15	1 磁器 碗	(11.2)	(3.2)	—	灰白	A	外面：染付有、丸形	口縁部～胴部 10%	瀬戸・美濃系
P15	2 磁器 碗	—	—	—	灰白	A	外面：染付有	口縁部～胴部破片	瀬戸・美濃系
P15	3 丸瓦	厚さ 1.7 ~ 2.0		ABDK	浅黄 2 SY-7/3	B	凸面：縞位ナデ 凹面：縞位ナデ (わずかに布目縞残存)	破片	—
P15	4 平瓦	厚さ 1.6 ~ 2.3		AB1	橙 SYR-6/8	B	凹面：立線子印金 凸面：縞位ナデ	破片	—
P15	5 平瓦	厚さ 1.3 ~ 1.4		ADN	灰 SY-4/1	B	凹面：布目縞 凸面：縞位ナデ縞、糸切り底	破片	布目(本/凹) 5 × 4
P15	6 平瓦	厚さ 1.4 ~ 1.6		AKN	黄灰 2 SY-5/1	B	凹面：布目縞、縞部ヨコナデ 凸面：平行叩き目縞、一部糸切り底粘土板一枚造り	破片	布目(本/凹) 7 × 5
P16	1 消患器 壺	—	—	AB1	灰黄褐 10YR-6/2	B	外面：平行叩き目縞 内面：同心円状工具叩き縞有	破片	—
P16	2 平瓦	厚さ 2.3 ~ 2.8		ADN	赤褐 SYR-4/6	B	凹面：縞位ナデ有 凸面：縞叩き底	破片	—
P17	1 丸瓦	厚さ 1.7 ~ 2.0		ABCDEKN	黄褐 SYR-3/1	B	凸面：縞位ナデ 凹面：布目縞	破片	布目(本/凹) 6 × 7

3 性格不明遺構

第1号性格不明遺構（第12～39図、第3～9表）

A～E-1～3グリッドから検出した。第2、4、6、10、16～19号ピットと重複関係にあり、第2、4、6号ピットに切られ、第10、16～19号ピットを切っていた。

調査区の大半をこの遺構が占めているが、一部が調査区域外にあり、正確な様相は不明である。規模は、検出長約20m、検出幅6.60～10.60m、深さは確認面から0.64～0.73mを測った。およそ東西方向から北西～南東方向に軸が傾く大きな溝状の掘り込みである。東から西へ向かうにつれ、幅が広がる。底面は、B・C-2グリッド付近においては一部島状になる部分が存在する。B・C-3グリッド付近では、土取りによる痕跡を疑う掘り込みが確認できた。

土層断面を観察すると、まず東西方向の断面のA-A'、B-B'（B-B'の上層はすべて近世の時期の攪乱と考えられる。）を見ると、その多くにソフトローム土粒子、ブロックが含まれ、ほぼ水平に堆積していることから人工的に埋め戻されたものと考えられる。また、西側は一気に埋めたかのように2層～3層しかないのに対し、東側は5層～6層と幾重にも堆積が確認できる。

つづいて、南北方向の断面であるC-C'、D-D'、E-E'を見る。

C-C'では島状になる箇所を確認できた。また、北側が先に掘られて埋められたあと南側が改めて掘り直されている様子が確認できた。

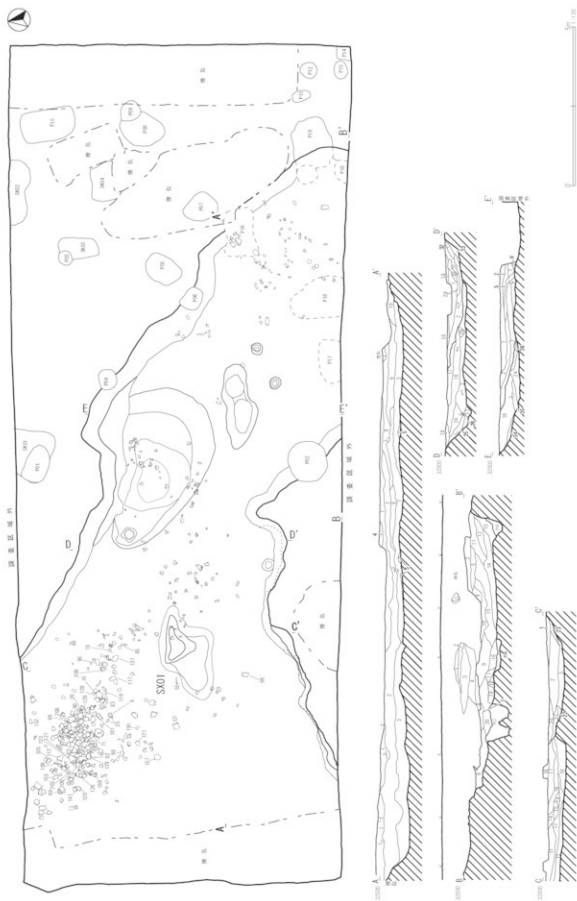
また、D-D'、E-E'を見ると、C-C'と同様に南側が掘り直しの後、埋まったことが確認できた。よってこの性格不明遺構は一度に掘られたのではなく、一担、北側が掘られ、埋まった後に南側が掘られ、その後改めて掘った可能性が高い。

出土遺物は数量的に、今回の調査の大部分を占めており、瓦がその大半を占める。遺物の分布は本遺構全体におよぶが、B-1グリッド付近に特に集中している。

瓦は、軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦が検出され、軒丸瓦が数点、軒平瓦は三重弧文や四重弧文を数十点含み均整唐文が完形で2点検出されたことは注目すべき点である。

瓦以外には瓦塔と瓦堂との推定されるものが検出された。瓦塔は還元焰焼成及び酸化焰焼成のものに分類でき、部位としては水輪部と屋蓋部、軸部、初軸部、基壇部の破片が検出されている。瓦塔のうち還元焰焼成の軸部については、欠損が激しいものの、4面ほぼ残存し、一層あたりの高さ、幅を伺い知ることができる個体があったため、塔全体の高さを推定するに足る資料があった。また、組物表現においては製作者の考え方（製作意図）を推測することができる資料もあり、今後の研究材料として大変貴重である。

一方、瓦堂は、屋蓋部の一部と推定されるものが確認されたのみであった。出土遺物、特に瓦と瓦塔は、一か所からまとまって検出されていることから、屋根からの自然転落などで埋まったのではなく、寺院が廃絶されたことによる廃棄などの目的でこの遺構が掘られたと考えられる。



第12圖 第1号性格不明遺構(1)

- 第1号性格不明遺構 (A-C) (2) (地) (注)
1. 相模原239-42 (埋戻、ソフトローム土層に設定)
 2. 東139-21 (ハードローム土層に設定)
 3. 東139-21 (多量にソフトローム土層を含む、土層不明)
 4. 東139-21 (埋戻、土層不明)
 5. 東139-21 (中量に埋戻、多量にソフトローム土層を含む)
 6. オーク原239-31 (埋戻、土層不明)
 7. 東139-21 (埋戻、土層不明、ソフトローム土層少量、一部多量に設定)
 8. 東139-21
 9. 東139-21 (土層不明、オーク原239-31に相当)
 10. 東139-21 (ソフトローム土層少量、中量に相当)
 11. 相模原239-42 (土層不明、ソフトローム土層少量に設定)
 12. 東139-21 (土層不明、ソフトローム土層少量に設定)
 13. オーク原239-42 (埋戻、土層不明、ソフトローム土層少量に設定)
 14. オーク原239-42 (中量に埋戻、ソフトローム土層少量に設定)
 15. 東139-21 (ソフトローム土層少量、ブロック埋戻)
 16. オーク原239-31 (ソフトローム土層少量に設定)
 17. 東139-21 (埋戻、土層不明)
 18. オーク原239-42 (埋戻、土層不明)
 19. 東139-21 (埋戻、土層不明、ソフトローム土層少量)
 20. オーク原239-31 (埋戻、土層不明、ソフトローム土層少量)
 21. 相模原239-21 (ソフトローム土層少量)
 22. 相模原239-21 (ソフトローム土層少量)
 23. オーク原239-31 (多量にソフトローム土層を含む)
 24. 相模原239-42 (土層不明、ソフトローム土層少量、中量に相当)
 25. オーク原239-31 (土層不明、ソフトローム土層少量)
 26. 東139-21 (埋戻、土層不明、ソフトローム土層少量)
 27. 東139-21 (埋戻)
 28. 東139-21 (埋戻)
 29. 相模原239-52 (埋戻、土層不明)

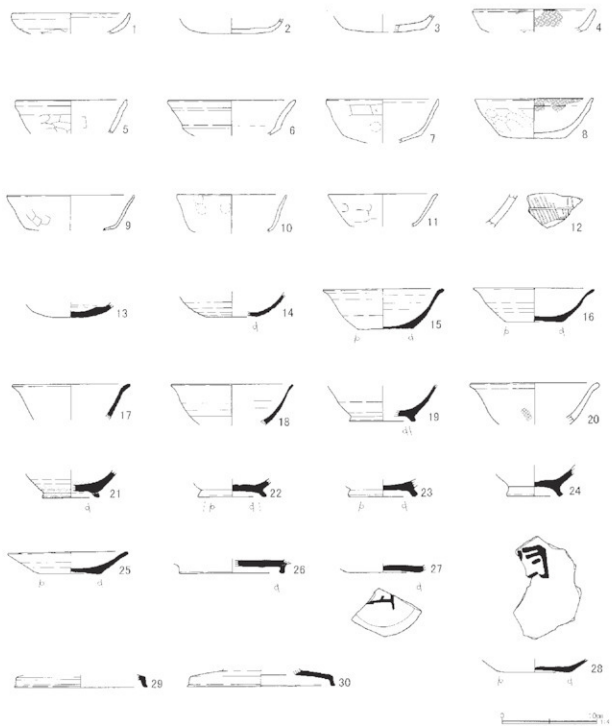
30. 相模原239-52 (土層不明、ソフトローム土層)
31. オーク原239-42 (埋戻、土層不明)
32. オーク原239-42 (埋戻、土層不明、ソフトローム土層少量)
33. 相模原239-42 (埋戻、土層不明)
34. オーク原239-42 (土層不明、ソフトローム土層少量)
35. 東139-21 (土層不明、ソフトローム土層少量)
36. 相模原239-42 (土層不明、ソフトローム土層少量)
37. 相模原239-42 (ソフトローム土層少量、ブロック埋戻、土層不明)
38. 東139-21 (中量に埋戻)
39. オーク原239-31 (ソフトローム土層少量、埋戻)
40. 東139-21 (ソフトローム土層)
41. 東139-21 (埋戻、土層不明)
42. 相模原239-21 (ソフトローム土層少量)
43. 東139-21 (ソフトローム土層少量、一部ブロック埋戻、中量に相当)
44. 東139-21 (ソフトローム土層少量、埋戻)
45. 相模原239-21 (中量埋戻、ソフトローム土層少量)
46. 東139-21 (ソフトローム土層少量)
47. オーク原239-31 (ソフトローム土層少量)
48. 東139-21 (埋戻)
49. 東139-21 (埋戻、土層不明)
50. 東139-21 (埋戻、土層不明、ソフトローム土層少量)

- 第1号性格不明遺構 (地)
1. ソフトローム土層 (埋戻、土層不明)
 2. 相模原239-21 (ソフトローム土層)、ブロック、及び埋戻土層 (ブロック)
 3. オーク原239-31 (中量に埋戻、ソフトローム土層少量)
 4. オーク原239-31 (土層不明、ソフトローム土層少量)
 5. 東139-21 (ごく少量にソフトローム土層を含む)
 6. 東139-21 (埋戻、土層不明)
 7. 相模原239-42 (ソフトローム土層、ブロック埋戻、土層不明)
 8. 東139-21 (中量に埋戻)
 9. オーク原239-31 (ソフトローム土層、埋戻)
 10. 東139-21 (ソフトローム土層)
 11. 東139-21 (埋戻、土層不明)
 12. 相模原239-21 (ソフトローム土層)
 13. 東139-21 (ソフトローム土層、一部ブロック埋戻、中量に相当)
 14. 東139-21 (ソフトローム土層、埋戻)
 15. 相模原239-21 (中量埋戻、ソフトローム土層少量)
 16. 東139-21 (ソフトローム土層)
 17. オーク原239-31 (ソフトローム土層)
 18. 東139-21 (埋戻)
 19. 東139-21 (埋戻、土層不明)
 20. 東139-21 (埋戻、土層不明、ソフトローム土層少量)

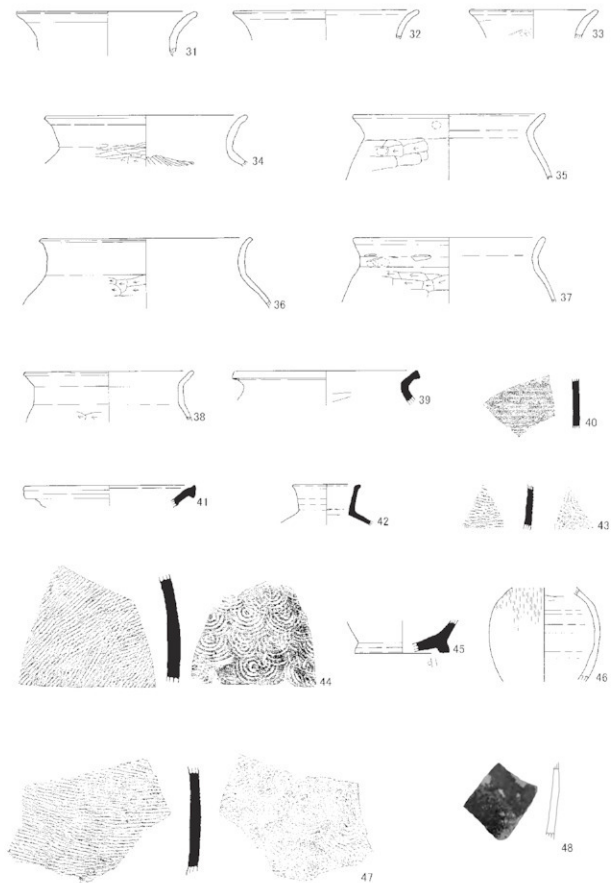
第13図 第1号性格不明遺構 (2)

第3表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表 (1)

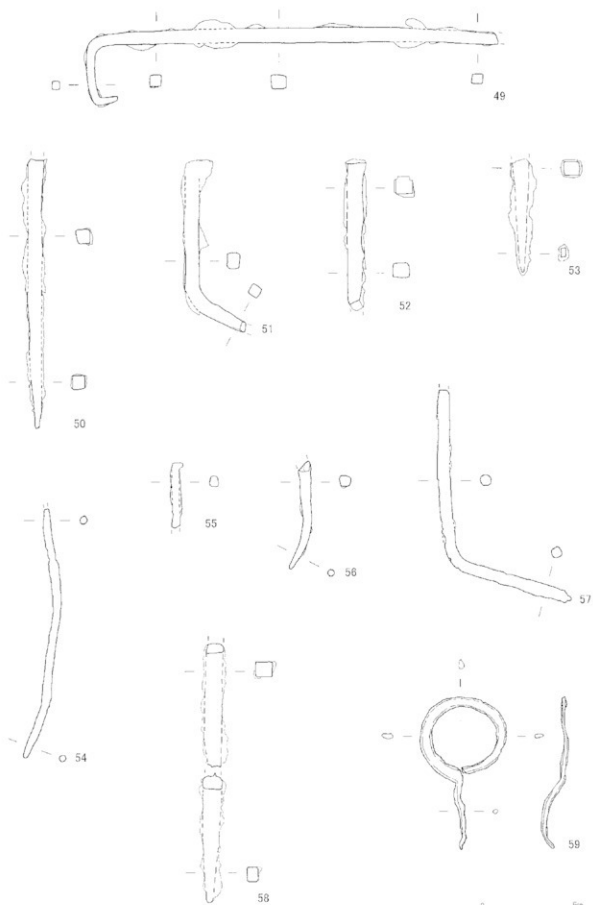
№	遺種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	土師器 土杯	(12.6)	(2.2)	—	BG1K	橙5YR-6/6	B	口縁部 10%		
2	土師器 土杯	—	(1.1)	—	ABC1	明赤焼 2.5YR-6/8	B	底部 80%		
3	土師器 土杯	—	(1.9)	—	BC1	明焼 7.5YR-5/6	B	底部 40%		
4	土師器 土杯	(12.0)	(2.4)	—	ABK	黄焼 10YR-3/1	B	口縁部～体部 10%	内外面埋付着	灯明皿 か?
5	土師器 高?	(11.8)	(3.5)	—	ABE1N	橙5YR-6/6	B	口縁部～体部 20%	外面：ヘラケズリ痕 内面：ヘラ磨痕	有
6	土師器 土杯	(12.6)	(3.7)	—	ABN	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部～体部 10%	有段口縁	
7	土師器 土杯	(12.0)	(3.0)	—	ABE1	明焼 7.5YR-5/8	B	口縁部～底部 25%	外面：ケズリ及び指圧圧痕 内面：底割り、指圧痕	
8	土師器 土杯	12.6	4.3	7.0	ABC1KMMO	橙5YR-6/6	A	100%	内面：炭化物 (すず)、付着 外面：指圧痕多数有	
9	土師器 土杯	(13.6)	(3.7)	—	ABC1JK	黄焼 7.5YR-7/8	B	口縁部～体部 10%	外面：わずかにヘラケズリ痕 口縁部わずかに外反する	
10	土師器 土杯	(11.8)	(4.0)	—	ABE1	橙5YR-6/8	B	口縁部～体部 20%	外面：指圧痕 底部は平底	
11	土師器 土杯	(11.6)	(3.4)	(5.3)	ABON	明赤焼 2.5YR-5/8	B	20%	外面：ヘラケズリ調整有	
12	土師器 土杯	—	—	—	AEGK	橙5YR-6/6	B	破片	外面：体部中央に傾斜方向に溝有 内面：底割り、炭文	
13	須恵器 平皿?	—	(1.6)	—	ABEN	黄灰 2.5Y-6/1	A	底部 100%	内面：ア字痕有	実野産
14	須恵器 土杯	—	(2.6)	(5.0)	ABF	灰白 2.5Y-8/2	B	体部～底部 20%	底部回転糸切り痕	南比企産
15	須恵器 土杯	12.8	4.3	5.7	ABE1	灰黄 2.5Y-6/2	B	100%	底部外面：回転糸切り痕 底部内面：わずかにすず付着	実野産
16	須恵器 土杯	(12.8)	3.5	6.0	ABJ1	灰オリーブ 5Y-6/2	B	底部～口縁部 70%	底部回転糸切り痕	
17	須恵器 土杯	(12.5)	(3.7)	—	AN	灰黄 2.5Y-6/2	A	口縁部～体部 10%	口縁部大きく反転する 内外面回転ア字痕有	実野産
18	須恵器 土杯 or 碗か?	(12.0)	(4.3)	—	ABC1	灰白 2.5Y-8/2	B	口縁部～体部 30%	口縁部反転する	
19	須恵器 土杯	—	(3.9)	(7.0)	AB1	灰白 5Y-7/2	B	底部～底部 30%	底部外面：回転糸切り痕高台ナデツケ	実野産
20	土師器 土杯	(13.9)	(4.4)	—	ABE1	にがい黄 5YR-6/4	B	口縁部～底部 30%	口縁部わずかに外反する	
21	須恵器 碗	—	(2.9)	(6.0)	AB	黄灰 2.5Y-6/1	B	体部～高台部 20%	内外面とも素面 回転ア字痕有 底部回転糸切り痕	南比企産
22	須恵器 碗	—	(2.0)	(7.3)	ABC1	灰10Y-5/1	B	底部 90%	底部回転ヘラナデ	
23	須恵器 碗	—	(1.8)	7.4	ABD1N	橙5YR-6/6	B	高台部 100%	底部外面：回転糸切り痕高台ナデツケ糸切り痕はナデ無し	
24	須恵器 高台碗	—	(2.8)	(6.0)	ABD1	灰黄 2.5Y-7/2	C	高台部 20%	底部ゆるやかに外反する	
25	須恵器 土杯	12.2	2.3	6.4	ABE1	にがい黄焼 10YR-6/4	B	口縁部～底部 80%	底部：回転糸切り痕	
26	須恵器 土杯	—	(1.5)	(11.3)	AB1	黄灰 5Y-7/2	B	底部 30%		実野産
27	須恵器 土杯	—	(0.9)	(7.6)	ABF	灰白 10YR-8/1	B	底部 30%	底部：素面「山」、または「山」か 底部回転糸切り痕有	南比企産
28	須恵器 蓋 or 土杯	—	(1.4)	7.4	ABD1MMO	にがい黄焼 10YR-5/3	A	底部 70%	内面：素面「山」か 底部外面：回転糸切り痕有	
29	須恵器 土杯	(14.0)	(1.3)	—	BF	にがい黄焼 10YR-6/4	B	口縁部 10%		南比企産
30	須恵器 土杯	(15.7)	(1.8)	—	AFLN	外面：灰赤 2.5YR-4/2 内面：にがい黄焼 5YR-5/3	B	10%	外面上部：自然剥付着	南比企産
31	土師器 土杯	(19.2)	(4.7)	—	ABC1J	橙5YR-6/6	B	口縁部 10%		



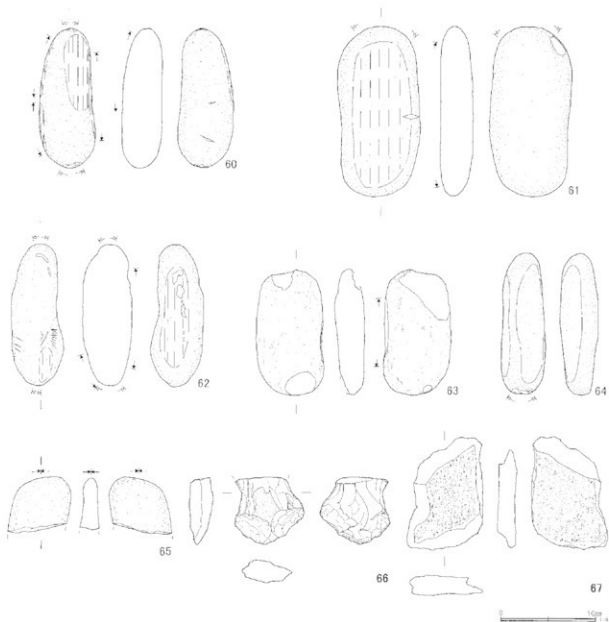
第14图 第1号性格不明遺構出土遺物(1)



第15圖 第1号性格不明遺構出土遺物(2)



第16圖 第1号性格不明遺構出土遺物(3)



第17図 第1号性格不明遺構出土遺物(4)

第4表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表(2)

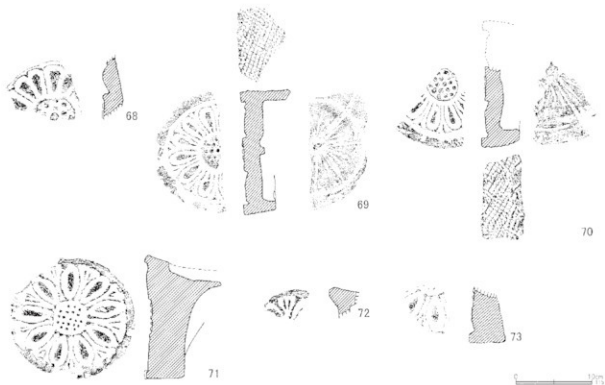
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	構成	残存率	手法、形態的特徴等	備考
32	土師器 壺	(19.6)	(3.1)	—	ABDJ	にぶい焼 7.5YR-5/4	B	口縁部 10%		
33	土師器 壺	(13.6)	(3.0)	—	ABDJ	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部 10%	小型の付冑か?	
34	土師器 壺	(21.0)	(5.4)	—	ABK	橙 5YR-6/6	B	口縁部 20%	外部：頸部へう調整 内部：頸部付近ミカキ調整	
35	土師器 壺	(20.2)	(7.0)	—	ABDEJW	にぶい焼 7.5YR-7/4	B	口縁部～胴部 20%	外蓋、頸部底面有 ヘラケズリ痕	
36	土師器 壺	(22.0)	(7.4)	—	ABEXW	明赤焼 5YR-5/6	B	口縁部～胴部 10%	口縁部や「コ」の字状 頸部縁位ヘラケズリ	
37	土師器 壺	(20.0)	(6.9)	—	ABDK	橙 5YR-6/6	B	口縁部～胴部 20%	口縁部「コ」の字状 頸部縁位ヘラケズリ痕	
38	土師器 壺	(18.0)	(5.4)	—	ABDI	明赤焼 2.5YR-5/6	B	口縁部 20%	口縁部「コ」の字状 頸部縁位ヘラケズリ痕	
39	須恵器 壺	(20.0)	(3.6)	—	ABJLN	灰白 5Y-7/1	B	口縁部 10%		産地不明
40	須恵器 壺	—	—	—	ABI	灰黄焼 10YR-6/2	C	胴部破片	外蓋：ナズ調整痕有	

第5表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表(3)

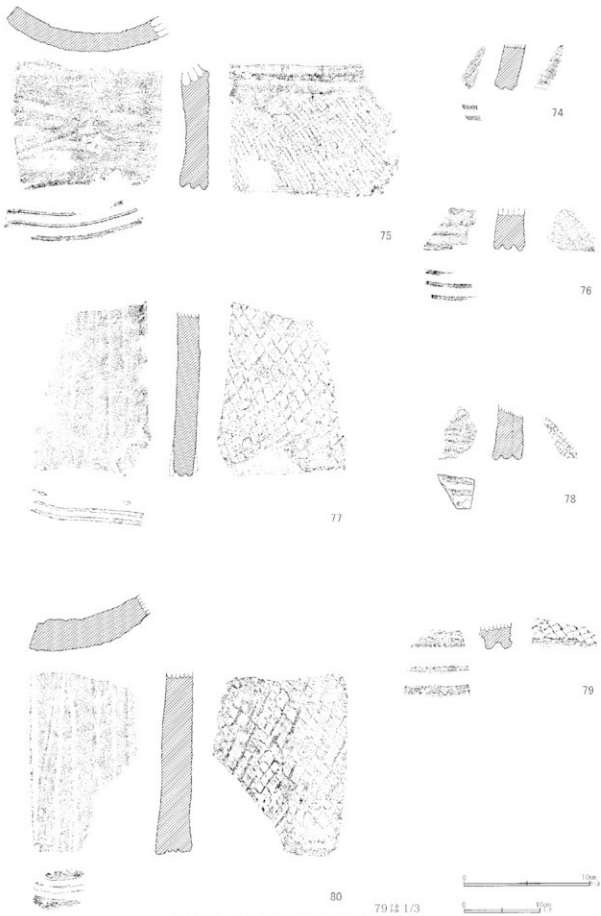
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
41	須恵器 壺	(18.3)	(2.3)	—	ADB	灰5Y-6/1	A	口縁部10%	内外面とも回転ナズ痕 口縁部残存率低	末野産
42	須恵器 短須恵	(7.2)	(4.3)	—	ADFH	IC6L黄橙 10YR-6/3	C	口縁部~肩部20%	回転ナズ痕有 口縁部残存率低	南比企産
43	須恵器 壺	—	—	—	ADD1	灰年4/	B	胴部破片	外面：平行叩き目痕有 内面：同心円状あて具痕有	末野産
44	須恵器 壺	—	—	—	AH1	灰7.5Y-5/1	B	破片	外面：平行叩き目痕有 内面：同心円状あて具痕有	末野産
45	須恵器 高須恵か	—	(3.4)	(10.0)	AC	灰白5Y-7/2	B	腰部~底部40%	内外面自然磨付痕 台付部大きく残存する 底部回転あて具後、外面をへう削り	仏真か?
46	陶器 小壺	—	(10.0)	—	ABDN	外面：灰褐5YR-4/2 内面：黄灰2.5Y-5/1	B	胴部20%	釉薬有	産地不明
47	須恵器 壺	—	—	—	ADD1N	灰年5/	A	破片	外面：平行叩き目痕有 内面：同心円状あて具痕、ナズ痕有	
48	陶器 壺?	—	—	—	ABCI	灰黄2.5Y-7/2	B	胴部破片	外面：自然磨付痕	

第6表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表(4)

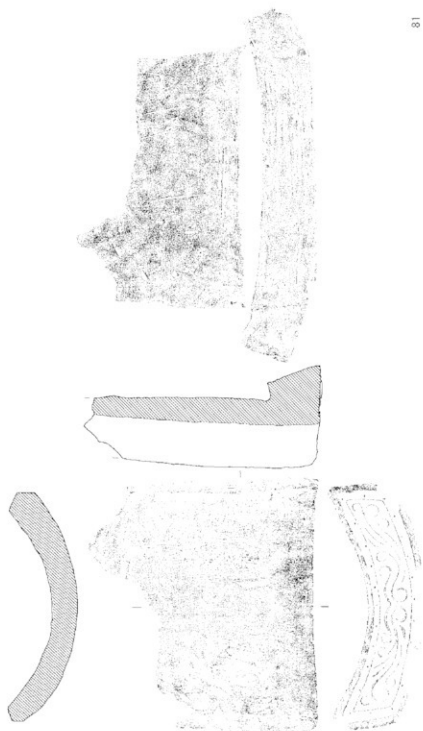
No.	器種	法	量	手法、形態の特徴等	備考
49	鉄製品 釘	最大長(21.9)cm, 最大幅7.0cm, 最大厚(7.0)cm, 重量51g		先端「コ」の字部分欠損	寺院における木工具か?
50	鉄釘	最大長(14.2)cm, 最大幅(7.0)cm, 最大厚8.0cm, 重量39g		頭部欠損	
51	鉄釘	最大長(19.1)cm, 最大幅0.8cm, 最大厚0.8cm, 重量26g		先端部欠損	
52	鉄釘	最大長(8.0)cm, 最大幅0.9cm, 最大厚0.9cm, 重量21.6g		頭部及び先端部欠損	
53	鉄釘	最大長(6.2)cm, 最大幅(1.4)cm, 最大厚(1.1)cm, 重量11g		頭部欠損	
54	鉄製品	最大長(13.2)cm, 最大幅0.5cm, 最大厚0.5cm, 重量10g			経線車の軸か?
55	鉄釘	最大長(3.4)cm, 最大幅(0.7)cm, 最大厚(0.6)cm, 重量2.8g		先端部欠損	
56	鉄釘	最大長(5.7)cm, 最大幅(0.8)cm, 最大厚(0.7)cm, 重量4g		頭部欠損	
57	鉄製品	最大長(11.3)cm, 最大幅0.6cm, 最大厚0.6cm, 重量15g			経線車の軸か?
58	鉄釘	最大長下部(6.9)cm, 上部(6.6)cm, 最大幅9.5cm, 最大厚8cm, 重量下部13g 上部21g			寺院鎌具としてか?
59	青銅製品 磨石(石押入)	最大長8.1cm, 最大幅4.5cm, 最大厚0.4cm, 重量13g			
60	磨石	最大長14.7cm, 最大幅6.0cm, 最大厚4.3cm, 重量499g		側面に数か所磨り痕、上下縁部に磨付痕有	砂岩
61	磨石	最大長18.1cm, 最大幅6.6cm, 最大厚3.5cm, 重量810g			砂岩
62	磨石?	最大長15.9cm, 最大幅5.6cm, 最大厚5.2cm, 重量632g		側面に横線の磨り痕、下部に磨付痕有	砂岩
63	磨石	最大長13.3cm, 最大幅7.2cm, 最大厚3.2cm, 重量443g		側面に磨り痕、一部上下に磨付痕有	砂岩
64	丸たき石	最大長14.9cm, 最大幅4.7cm, 最大厚4.0cm, 重量419g		下部先端に磨付痕	砂岩
65	磨石	最大長(6.1)cm, 最大幅0.4cm, 最大厚2.0cm, 重量115g		全面に磨り痕有	花崗岩
66	打割石岸	最大長(17.1)cm, 最大幅7.4cm, 最大厚2.5cm, 重量130g			砂岩
67	板石礎礎	最大長12.0cm, 最大幅8.0cm, 最大厚2.1cm			板石片内面



第18図 第1号性格不明遺構出土遺物(5)



80
79は1/3
第19図 第1号性格不明遺構出土遺物(6)



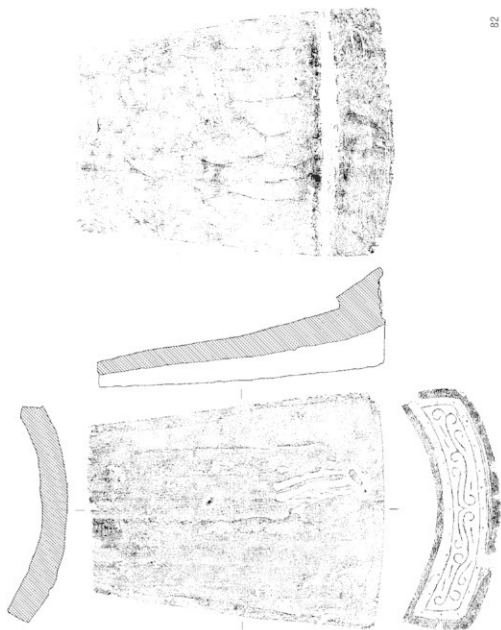
81



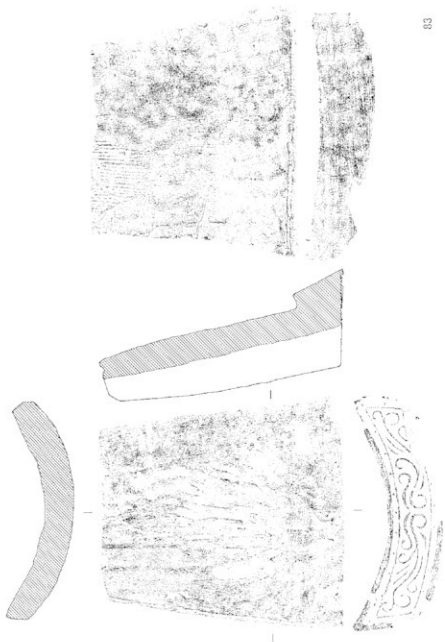
第20圖 第1号性格不明遺構出土遺物(7)



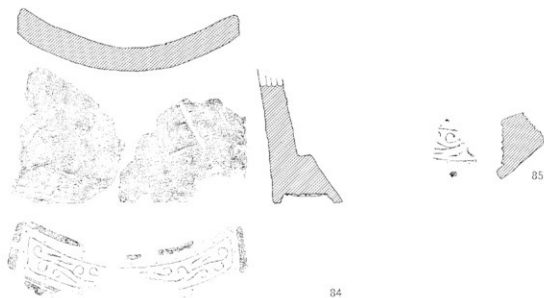
82



第21圖 第1号性格不明遺構出土遺物(8)

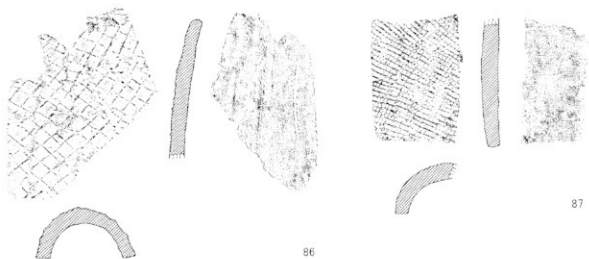


第22圖 第1号性格不明遺構出土遺物(9)



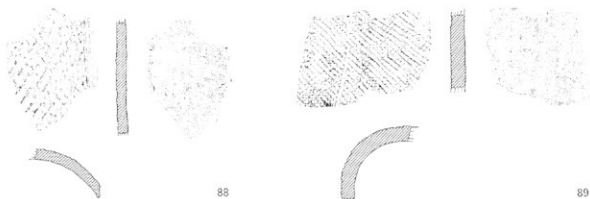
84

85



86

87

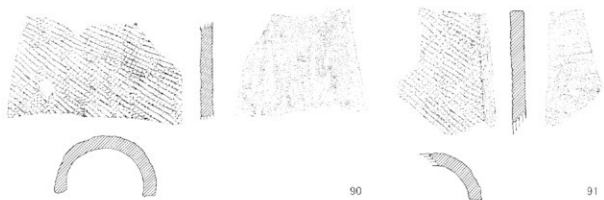


88

89

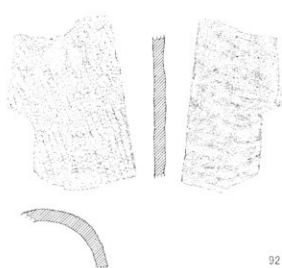


第23圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (10)

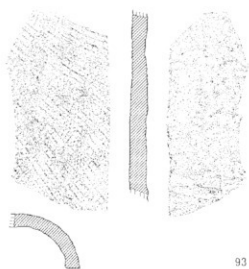


90

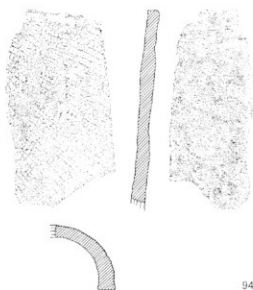
91



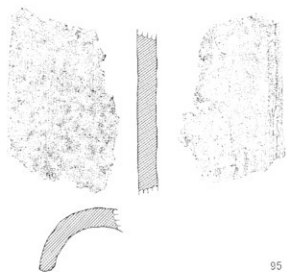
92



93



94



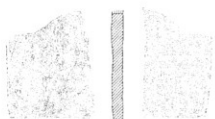
95

第24圖 第1号性格不明遺構出土遺物(11)

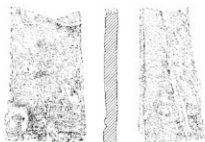




第25圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (12)



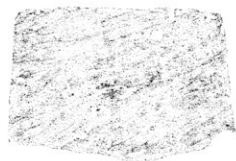
104



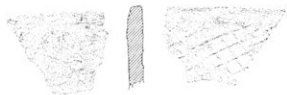
105



106



107



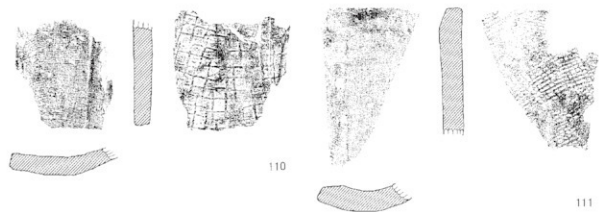
108



109



第26図 第1号性格不明遺構出土遺物(13)



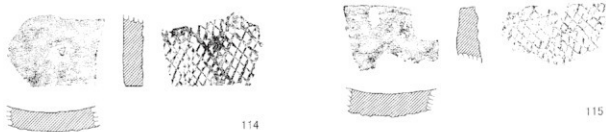
110

111



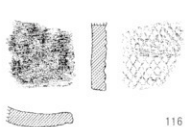
112

113

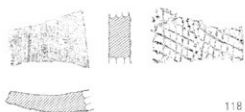


114

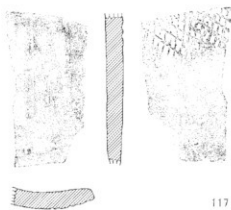
115



116



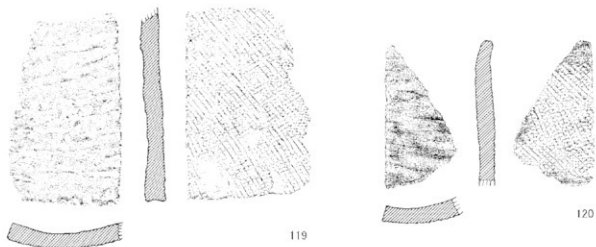
118



117

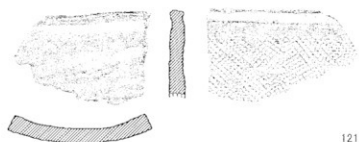
第27圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (14)





119

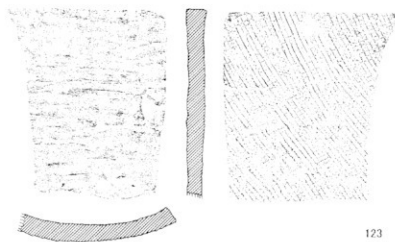
120



121



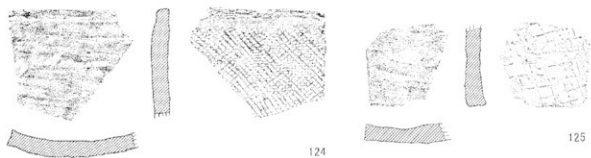
122



123

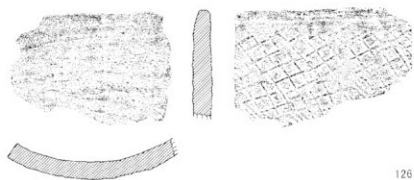
第28圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (15)



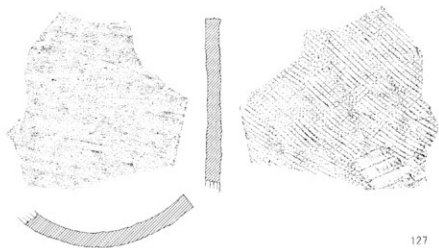


124

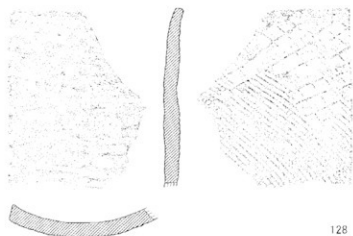
125



126



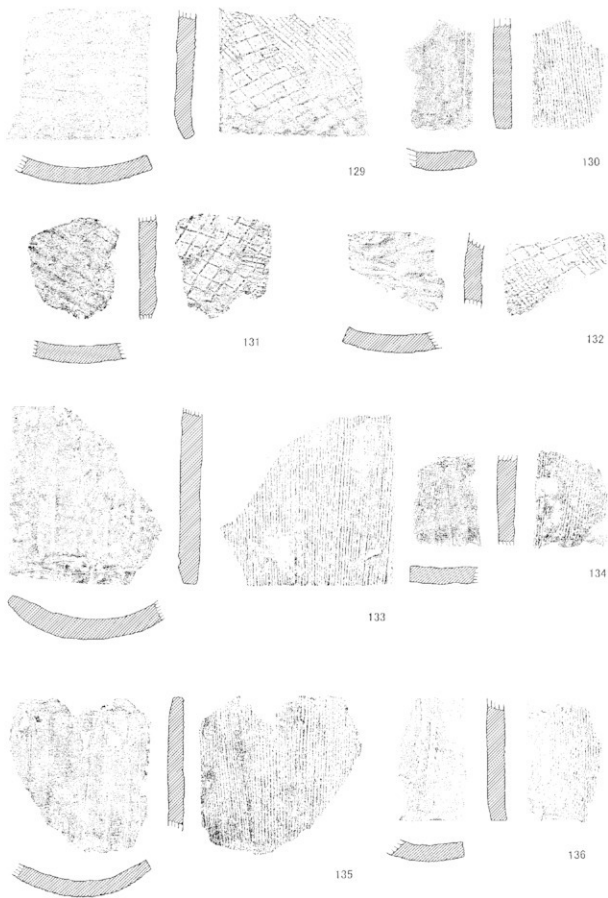
127



128

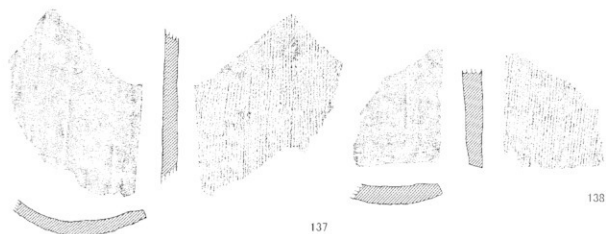
第29圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (16)





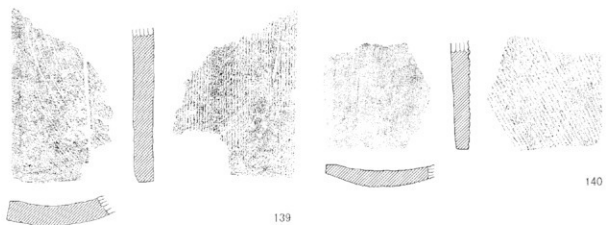
第30圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (17)





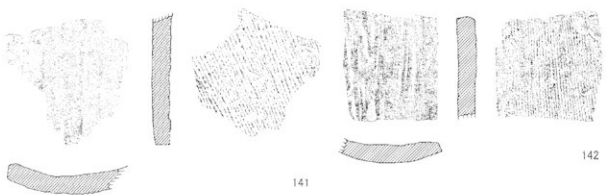
137

138



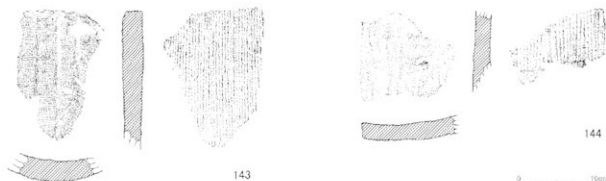
139

140



141

142

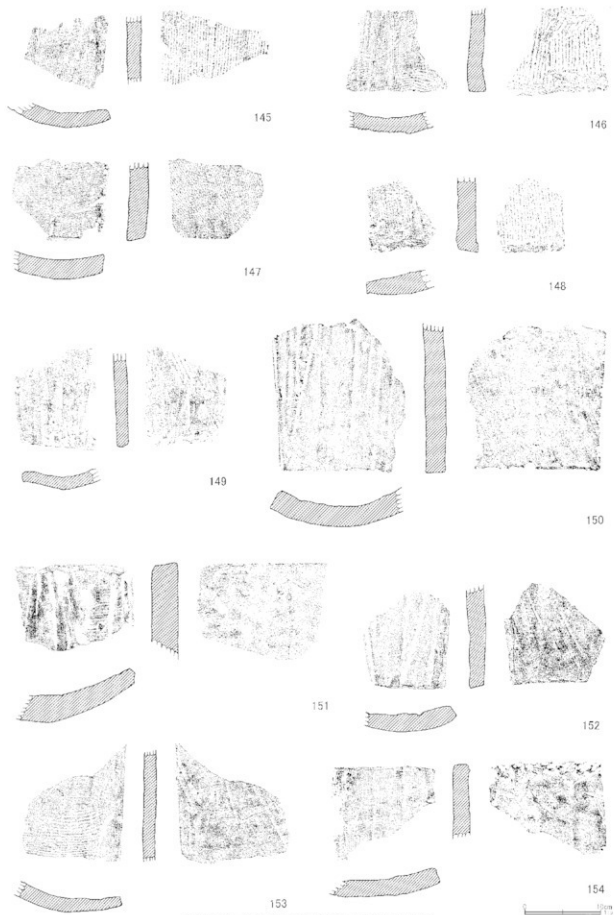


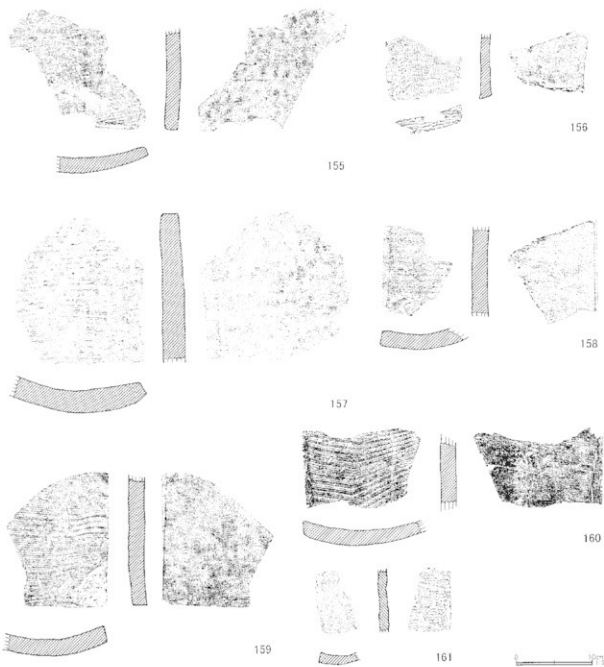
143

144

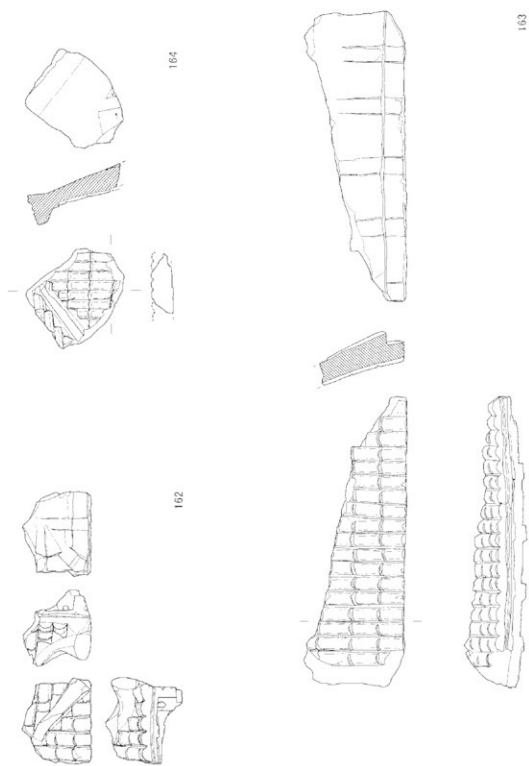
第31圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (18)



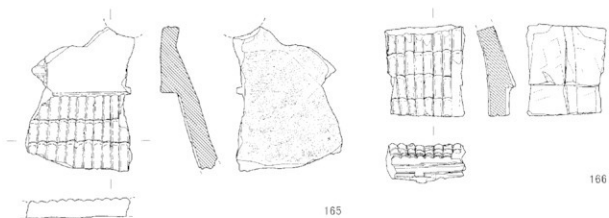




第33圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (20)

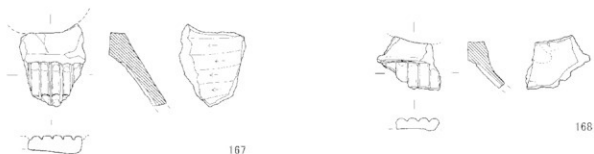


第34图 第1号性格不明遺構出土遺物 (21)



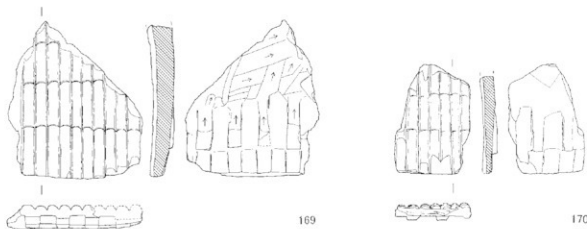
165

166



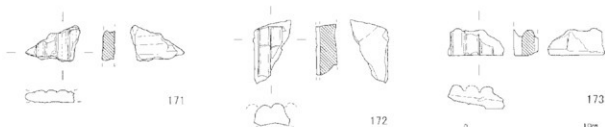
167

168



169

170



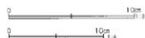
171

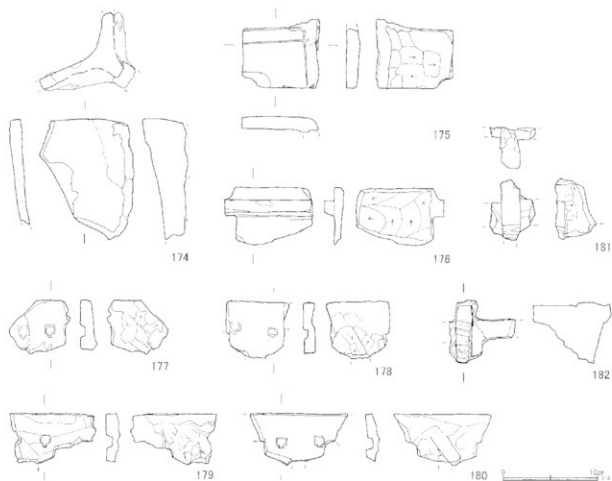
172

173

171、172、173は1/3

第35圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (22)





第36図 第1号性格不明遺構出土遺物 (23)

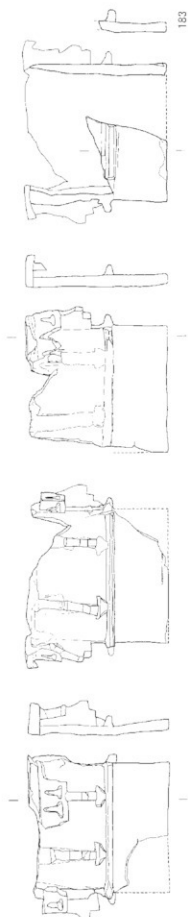
第7表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表 (5)

No.	器種	法量 (cm)	手法の特徴等	布目 (本/cm)	胎土	色調	組成	残存率	備考
68	横弁9葉型華文軒丸瓦	直径 (15.0?)	瓦当面: 中間直径推定 5.5 cm、蓮子9個 (他欠損) 蓮弁幅縁縁で区画され、肉厚、丸み有型弁、界線なし 裏面: ナズ型整 成形技法: 印籠つぎ法か?	—	ADIXMN	灰褐 7 DIX—4/2	6	破片	
69	横弁12葉型華文軒丸瓦	厚さ 1.2~2.4 瓦当厚 2.4 瓦当直径 16.2	瓦当面: 中間直径 4.2 cm、蓮子 10 個確認 (内3個 潰れ)、 型弁「V」字状、界線なし、端面は平切のナズ 裏面: 布紋り痕 瓦当外周: 斜格子小叩き 成形技法: 一本造り	8×7	ADIN	灰オリブ 5Y—6/2	6	破片	
70	横弁12葉型華文軒丸瓦	厚さ 1.9 瓦当厚 1.8~2.4 瓦当直径 17.2	瓦当面: 中間直径 4.4 cm、蓮子 16 個 (3個欠損)、型弁「V」字状、界線なし 界線は直立縁で端面は平切瓦当 裏面: 布紋り痕 瓦当外周: 斜格子小叩き 成形技法: 一本造り	9×9	ADIN	黄灰 2.5Y—6/1	6	瓦当部破片	
71	横弁9葉型華文軒丸瓦	瓦当厚 4.5~7.0 瓦当直径 16.8 (16.0~16.8)	瓦当面: 中間直径 4.4 cm、蓮子 20 個 (やや不規則に配置)、 蓮弁幅縁で区画しやや肉厚、型弁「V」字状、界線なし、 界線直立 端面は平切でヘラケズリ、また印籠つぎによるカキヤブ り痕が欠損部分に有 瓦当外周: 斜格子小叩き 成形技法: 印籠つぎ法	—	ADIXN	オリブ黒 10Y—3/2	6	破片	
72	横弁9葉型華文軒丸瓦	—	瓦当面: 蓮弁幅縁で表裏、肉厚のもの、型弁「V」字状、 界線なし、界線は直立縁で端面は平切 丸瓦凸、凸面: ヘラケズリ、成形技法: 印籠つぎ	—	ADEN	黄褐 5YR-2/1	6	破片	
73	横弁9葉型華文軒丸瓦	直径 (16.0)	瓦当面: 中間直径 (4.4) cmと推定、蓮子3個確認、蓮 弁幅縁で区画し型弁は「V」字状 瓦当外周: 直立縁 瓦当表面: ナズ 成形技法: 不明	—	ADIN	灰 5Y-4/1	6	瓦当部破片	
74	三葉紋軒平瓦?	厚さ 2.6~2.9	瓦当面: 型抜き 裏: 不明 凸面: 布目痕 凸面: ナズ型整痕	—	ABJ	にがい黄 2.5Y-6/3	6	破片	

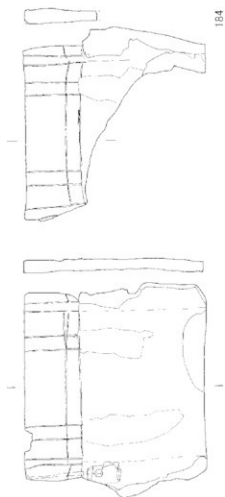
No.	器種	寸法 (mm)	手法の特徴等	布目 (本、G)	胎土	色調	構成	残存率	備考
75	三重瓦 軒平瓦	厚さ 2.5~3.6 瓦当厚 3.6 幅幅 15.4 平瓦厚 2.1	瓦当面：型挽き 硝、段額（粘土板貼り付け成形） 凹面：積位ナデ 凸面：斜格子小叩き（平瓦縁部ナデ） 粘土縁巻造り	—	ACI	にぶい黄緑 10YR-7/4	B	破片	
76	三重瓦 軒平瓦	厚さ 2.5~4.1 瓦当厚 4.1 幅幅 —	瓦当面：型挽き 硝、段額（粘土板貼り付け成形） 凹面：積位ナデ 凸面：斜格子小叩き 粘土縁巻造り	—	AEIN	黄沢 2 5Y-4/1	B	破片	
77	三重瓦 軒平瓦	瓦当厚 3.7 平瓦厚 2.7~3.1	瓦当面：型挽き 硝、無額 凹面：布目織、横巻織 凸面：斜格子小叩き 粘土縁巻造り	7×7	ABEIN	にぶい黄緑 10YR-6/3	B	破片	
78	三重瓦 軒平瓦	厚さ 3.2~4.1	瓦当面：型挽き 硝、粘土板貼り付け成形 凹面：積位ナデ、凸面 斜格子小叩き	—	ABC	灰白 2 5Y-7/1	B	右側面破片	
79	三重瓦 軒平瓦	—	瓦当面：型挽き 硝、粘土板貼り付け成形か？ 凹面：割離により不明、凸面：格子小叩き	—	ABI	灰 5Y-5/1	B	破片	
80	四重瓦 軒平瓦	厚さ 2.8~4.8 瓦当厚 5.3 幅幅 — 平瓦厚 —	瓦当面：型挽き 硝、無額 凹面：布目織、横巻織、布とじ目織 凸面：斜格子小叩き（わずかにナデ織有） 粘土縁巻造り	7×8	AD	にぶい黄緑 10YR-5/4	B	破片	
81	均整造草文 軒平瓦	厚さ 2.1~7.6 瓦当厚 6.6 幅幅 7.5	瓦当面 厚さ 6.1cm 硝、段額、積位ナデ 凹面：布目織（一部ヘラウズリ、及びナデ調整有） 凸面：縦位ナデ及びヘラウズリ調整	6×7	ABCI	灰黄緑 10YR-5/2	B	50%	
82	均整造草文 軒平瓦	最大長 38.0 最大幅 28.7 厚さ 1.7~4.3 重量 7.8kg	瓦当面 瓦当厚 6.1cm、幅幅 7.0cm、厚さ 6.1cm、 硝、段額、積位ナデ 凹面：布目織、横巻織（積位ナデにより一部ナデ消し） 凸面：縦位ナデ及びヘラウズリ調整	7×6	ABCI	橙 7 5YR-3/6	B	完整	
83	均整造草文 軒平瓦	最大長 32.3 最大幅 28.7 厚さ 2.6~3.9 重量 6.6kg	瓦当面 瓦当厚 7.5cm、幅幅 6.8cm、厚さ 7.5cm、 硝、段額、積位ナデ、瓦当部未付着 凹面：布目織（瓦当周辺積ナデ、それ以外は縦位ナデでナデ消し） 凸面：縦位ナデ	—	ABCIJ	にぶい黄緑 7 5YR-7/3	B	球状光沢	
84	均整造草文 軒平瓦	厚さ 2.9~3.7	瓦当厚 (7.5cm)、幅幅 6.2cm、厚さ 7.5cm、 硝、段額、積位ナデ、瓦当部未付着 凹面：布目織（瓦当周辺積ナデ、それ以外は縦位ナデでナデ消し） 凸面：縦位ナデ	6×7	AEIN	黄沢 2 5Y-5/1	B	瓦当部破片	
85	均整造草文 軒平瓦	瓦当厚 7.3 幅幅 7.9	瓦当面：縁幅及び形幅は断面がやや三角形、上下脇部に 珠文 硝、段額、積位ナデ	—	ABI	黄沢 2 5Y-1	B	瓦当部破片	
86	丸瓦	厚さ 1.5~2.0	凸面：斜格子小叩き 凹面：布目織、一部縦位ナデ調整 粘土縁丸末造り	9×8	AEIN	灰白 2 5Y-7/1	B	狭縁部割	
87	丸瓦	厚さ 1.5~2.2	凸面：斜格子小叩き 凹面：布目織 粘土縁丸末造り	6×7	AIN	灰 N-5/	A	広縁部割	
88	丸瓦	厚さ 1.2~1.4	凸面：斜格子小叩き 凹面：布目織、横部ナデ織 粘土縁丸末造り	7×7	AEIN	灰 5Y-5/1	B	破片	
89	丸瓦	厚さ 1.6~2.0	凸面：斜格子小叩き 凹面：布目織（一部縦位ナデ） 粘土縁造り	8×8	AEIN	明黄緑 10YR-6/6	B	破片	
90	丸瓦	厚さ 1.5~1.7	凸面：斜格子小叩き 凹面：布目織（後一部を積位ナデにより磨り消される） 粘土縁丸末造り	10×8	ABD	黄沢 2 5Y-7/4	B	破片	
91	丸瓦	厚さ 1.6~1.8	凸面：斜格子小叩き 凹面：布目織（後一部を積位ナデにより磨り消される） 粘土縁丸末造り	8×8	ABEIN	灰 7 5Y-6/1	B	破片	
92	丸瓦	厚さ 1.3~1.8	凸面：斜格子小叩き 凹面：縦位ナデ 粘土縁丸末造り	—	ABMIN	灰 5Y-4/1	B	破片	
93	丸瓦	厚さ 1.6~2.3	凸面：斜格子小叩き 凹面：積位ナデ 粘土縁造り	—	AEIN	灰 5Y-5/1	B	破片	
94	丸瓦	厚さ 1.3~2.3	凸面：斜格子小叩き（一部ナデ消し） 凹面：積位ナデ 粘土縁丸末造り	—	AD	灰 N-6/	B	狭縁部割	
95	丸瓦	厚さ 2.0~2.5	凸面：縦位ナデ 凹面：布目織、布とじ目織、横部ナデ調整、側面裏取り 粘土縁丸末造り	8×8	ABDEGHIN	黄沢 7 5YR-6/4	B	破片	
96	丸瓦	厚さ 0.6~1.8	凸面：積位ナデ 凹面：布目織、横巻織（両端部ナデ調整織有） 粘土縁丸末造り	10×10	AIE	灰 N-4/	B	広縁部割	
97	丸瓦	厚さ 1.7~2.0	凸面：縦位ナデ（野先及び側面裏取り調整） 凹面：布目織 粘土縁丸末造り	7×8 8×9	AEIN	凸面 黄赤橙 2 5YR-3/6 凹面 にぶい橙 7 5YR-6/6	B	広縁部割	裏面未塗?
98	丸瓦	厚さ 1.1~1.9	凸面：縦位ナデ 凹面：布目織 粘土縁丸末造り	6×5 2×4	ABDMN	灰 7 5Y-5/1	B	広縁部割	
99	丸瓦	厚さ 1.6~2.0	凸面：ヘラウズリ後縦位ナデ 凹面：布目織、布とじ目織、横部縦位ナデ 側面裏取り有 粘土縁造り	6×6	AEIN	にぶい黄緑 10YR-6/4	B	破片	
100	丸瓦	厚さ 1.5~1.8	凸面：積位ナデ、側縁圧痕有 凹面：布目織、側面裏取り有 粘土縁造り	7×7	ABD	明黄緑 2 5Y-7/6	B	破片	
101	丸瓦	厚さ 1.1~1.9	凸面：縦位ナデ 凹面：布目織 粘土縁丸末造り	7×9	AIE	暗緑灰 7 50Y-4/1	B	破片	

No.	器種	流量 (cm)	手法の特徴等	布目 (本、gr)	胎土	色調	構成	残存率	備考
102	丸瓦	厚さ 2.0~2.1	凸面：横位ナデ 凹面：布目僅、わずかに、後に縦位ナデ消し 粘土板造り	7×7	AD1	明黄緑 10YR-6/6	B	広輪部割	
103	丸瓦	厚さ 1.7~2.4	凸面：横位ナデ 凹面：布目僅、端部はヨコナデ調整後者	6×6	ABDKHO	にぶい黄緑 10YR-7/4	B	広輪部割	
104	丸瓦	厚さ 1.2~1.5	凸面：横位ナデ 凹面：布目僅	7×7	AB	灰 5Y-6/1	B	広輪部割	
105	丸瓦	厚さ 1.5~1.7	凸面：横位ナデ 凹面：布目僅、一部ナデ消し、端部ナデ調整 粘土増九本造り	6×6	ABDGN	凸面：灰オリーブ 5Y-6/2 凹面：オリーブ系 5Y-3/1	B	広輪部割	
106	丸瓦	—	凸、凸面ともナデ僅	9×6	AFGIN	灰 7.5Y-6/1	B	破片	玉縁式
107	平瓦	厚さ 1.9~2.4	凹面：斜位ナデ 凸面：斜格子大叩き 粘土板一本造り	—	ADGN	灰黄 2.5Y-6/2	B	狭輪部割	
108	平瓦	厚さ 1.5~2.3	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子大叩き（端部はヨコナデ） 粘土板造り	—	ADN	オリーブ黄 5Y-3/1	B	狭輪部割	
109	平瓦	厚さ 2.0~3.3	凹面：布目僅、横骨僅 凸面：斜格子大叩き（後にナデ消し） 粘土板横骨造り	8×9	ADN	灰白 2.5Y-7/1	B	狭輪部割	
110	平瓦	厚さ 1.9~2.5	凹面：布目僅、糸切り僅、糸とじ僅 凸面：正格子叩き 粘土板横骨造り	7×8	ADH	灰黄 2.5Y-6/2	B	広輪部割	
111	平瓦	厚さ 2.0~3.0	凹面：布目僅、端部ナデ消し調整 凸面：斜格子小叩き横ナデ消し 粘土板一枚造り	6×7	ADN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	狭輪部割	
112	平瓦	厚さ 1.3~2.0	凹面：布目僅、横骨僅 凸面：斜格子小叩き 粘土板横骨造り	8×8	ABDGN	灰オリーブ 5Y-6/2	B	狭輪部割	
113	平瓦	厚さ 1.0~1.2	凹面：布目僅（上部に階ナデ僅） 凸面：斜格子小叩き 粘土板一枚造り	6×7	ADN	焼灰 7.5YR-6/1	B	破片	
114	平瓦	厚さ 2.2~2.6	凹面：横位ナデ（わずかに布目僅有） 凸面：斜格子小叩き（一部ナデ消し） 粘土板横骨造り	—	ADK	にぶい橙 5YR-6/4	B	広輪部割	
115	平瓦	厚さ 1.9~3.0	凹面：ナデ調整、糸切り僅 凸面：斜格子小叩き 粘土板一枚造り	—	ADN	浅黄 2.5Y-7/4	B	狭輪部割	
116	平瓦	厚さ 1.8~2.0	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子小叩き 粘土板造り	—	ABCIJ	黄緑 2.5Y-5/3	B	広輪部割	
117	平瓦	厚さ 1.5~2.4	凹面：布目僅、横骨僅、端部ヘラケズリによる消し調整 凸面：上部斜格子小叩き（それ以外はナデ調整後） 側面面取り調整 粘土板一枚造り	7×7	ADK	にぶい黄緑 10YR-7/4	A	破片	
118	平瓦	厚さ 1.7~2.4	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子小叩き 粘土板一枚造り	—	ADEN	にぶい黄緑 10YR-7/4	B	破片	
119	平瓦	厚さ 1.9~2.7	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子小叩き 粘土板造り	—	ADGN	凹面：にぶい黄緑 10YR-5/3 凸面：黄緑 10YR-5/4	B	広輪部割	
120	平瓦	厚さ 1.5~2.4	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子小叩き、端部周辺ナデ僅 粘土板造り	—	ADN	黄灰 2.5Y-6/1	A	狭輪部割	
121	平瓦 特殊瓦	厚さ 1.6~2.2	凹面：横位ナデ調整 凸面：斜格子小叩き（端部ナデ調整） 粘土板造り	—	ADN	黄緑 2.5Y-3/1	B	破片	標部付近か？
122	平瓦	厚さ 1.9~2.4	凹面：横位ナデ、糸切り僅 凸面：斜格子小叩き 粘土板一枚造り	—	ADGN	灰 7.5Y-6/1	B	広輪部割	端部、酸化鉄付着
123	平瓦	厚さ 2.0~2.7	凹面：横位ナデ（側面面取り） 凸面：斜格子小叩き 粘土板造り	—	AD1	にぶい黄緑 10YR-5/4	B	狭輪部割	
124	平瓦	厚さ 1.6~2.2	凹面：横位ナデ、糸切り僅 凸面：斜格子小叩き、端部ヨコナデ 粘土板造り	—	ADGN	灰黄 2.5Y-6/2	B	狭輪部割	酸化鉄付着
125	平瓦	厚さ 1.8~2.4	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子大叩き（一部小叩き） 粘土板造り	—	ADN	灰白 2.5Y-6/2	B	広輪部割	
126	平瓦	厚さ 1.6~2.5	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子大叩き（一部に小叩き有）、端部横位ナデ 粘土板造り	—	ADGNH	焼灰 7.5YR-4/1	B	狭輪部割	
127	平瓦	厚さ 1.8~2.1	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子小叩き、一部斜格子大叩き、酸化鉄付着 粘土板造り	—	ADEN	灰 5Y-6/1	A	狭輪部割	
128	平瓦	厚さ 1.0~2.3	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子小叩き（一部大叩き部分有） 粘土板造り	—	ADGNH	凹面：にぶい黄緑 10YR-6/3 凸面：明黄緑 10YR-6/6	B	狭輪部割	
129	平瓦	厚さ 1.6~2.5	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子大叩き（一部に小叩き有）、側面面取り 粘土板造り	—	ADHN	黄緑 2.5Y-5/3	B	広輪部割	
130	平瓦	厚さ 2.3~2.4	凹面：布目僅（端部ナデ消し） 凸面：縦網形僅 粘土板造り	7×7	AD1	灰 5Y-6/1	B	広輪部割	
131	平瓦	厚さ 2.2~2.6	凹面：ナデ 凸面：斜格子大叩き（一部小叩き）	—	ADN	にぶい黄 2.5Y-6/4	B	破片	
132	平瓦	厚さ 2.0~2.3	凹面：横位ナデ 凸面：斜格子大叩き後斜格子小叩き 粘土板一枚造り	—	ADEN	浅黄 2.5Y-7/3	B	破片	

No.	器種	流量 (cm)	平法の特徴等	布目 (本、G)	土土	色調	構成	残存率	備考
133	平瓦	厚さ 1.2~2.9	凹面：布目織、横書織、糸切り織、端部ナズ織有 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	7×6 7×8	ABDHN	淡黄 2.5Y-7/3	B	広域割削	
134	平瓦	厚さ 2.0~2.4	凹面：布目織、端部ナズ消し、横書織、糸切り織 凸面：縦向き織（指頭圧痕多数有） 粘土板一枚造り	8×8	AN	黄灰 2.5Y-4/1	B	破片	
135	平瓦	厚さ 1.4~2.1	凹面：布目織、横書織、一部指ナズ織 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	7×7	AEN	灰 5Y-6/1	A	狭域割削	
136	平瓦	厚さ 2.1~2.4	凹面：布目織、端部ナズ消し 凸面：縦向き織（一部指ナズ織） 粘土板一枚造り	9×9	AEN	黄橙 7.5YR-7/8	B	広域割削	
137	平瓦	厚さ 1.4~1.9	凹面：布目織、横書織、端部ナズ調整 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	6×6 7×6 8×7	BDHIN	灰橙 7.5YR-6/2	B	破片	
138	平瓦	厚さ 1.6~2.5	凹面：布目織、裏にナズ消し、横書織、端部ナズ調整 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	7×7	ABDN	明褐色 7.5YR-7/1	B	広域割削	
139	平瓦	厚さ 2.1~2.8	凹面：布目織、布とじ織、斜位ナズ消し（端部ナズ調整織） 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	7×7	AEN	灰 5Y-5/1	B	広域割削	
140	平瓦	厚さ 1.2~2.4	凹面：布目織、糸切り織、横書織 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	5×6	AEJO	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	広域割削	
141	平瓦	厚さ 2.1~2.6	凹面：布目織、横書織（端部ナズ織） 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	6×7	ADJ	にぶい橙 7.5YR-5/4	B	広域割削	
142	平瓦	厚さ 2.1~2.4	凹面：布目織（一部縦位ナズ消し）、糸切り織 凸面：縦向き織（一部指頭圧痕） 粘土板一枚造り	5×6	ABDN	黄灰 2.5Y-6/1	B	狭域割削	
143	平瓦	厚さ 2.1~2.7	凹面：布目織、横書織 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	6×6	ABDJJ	灰黄橙 10YR-6/2	B	狭域割削	
144	平瓦	厚さ 2.0~2.3	凹面：布目織、裏に懸架工具による調整織 凸面：縦向き織（工具一様に残り来か？） 粘土板一枚造り	6×6	ABDN	灰白 2.5Y-8/1	B	破片	
145	平瓦	厚さ 1.7~2.1	凹面：布目織、端部ナズ調整 凸面：縦向き織（指頭圧痕有） 粘土板一枚造り	7×7	ABN	黄灰 2.5Y-5/1	B	破片	
146	平瓦	厚さ 1.7~2.3	凹面：布目織、横書織 凸面：縦向き織（斜位付近ナズ調整） 粘土板一枚造り	6×6	ABJN	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	広域割削	
147	平瓦	厚さ 2.3~2.5	凹面：布目織（側面裏取り） 凸面：縦向き織（一部磨り消される） 粘土板一枚造り	8×8	AEN	黄灰 2.5Y-5/1	B	広域割削	
148	平瓦	厚さ 1.5~2.6	凹面：縦向き織 凸面：縦向き織	—	EN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	広域割削	
149	平瓦	厚さ 1.5~1.8	凹面：縦位ナズ、横書織、糸切り織 凸面：縦向き後ナズ消し、側面裏取り 粘土板一枚造り	—	ABDJJ	淡黄 2.5Y-7/4	B	狭域割削	
150	平瓦	厚さ 2.5~2.8	凹面：布目織、横書織、布とじ目織 凸面：縦向き織 粘土板一枚造り	9×8	ABDN	灰橙 7.5YR-6/2	B	狭域割削	
151	平瓦	厚さ 2.0~3.5	凹面：布目織、縦位ナズ、横書織 凸面：縦位ナズ、側面裏取り 粘土板一枚造り	9×8	ABDEN	凹面：黄灰 2.5Y-4/1 凸面：灰橙 7.5YR-4/2	B	狭域割削	
152	平瓦	厚さ 1.6~2.4	凹面：布目織、横書織、布とじ織（端部ナズ織） 凸面：縦位ナズ（側面裏取り） 粘土板一枚造り	9×9	ABDN	黄橙 2.5Y-5/3	B	狭域割削	
153	平瓦	厚さ 1.4~2.0	凹面：布目織（裏に縦位ナズにより磨り消し） 凸面：縦位ナズ 粘土板一枚造り	7×8	ABDJ	褐色 5YR-4/1	B	破片	
154	平瓦	厚さ 2.0~2.3	凹面：布目織、横書織、布とじ目織 凸面：ナズ織（下部に布目織） 粘土板一枚造り	7×8	ABDN	灰黄 2.5Y-6/2	B	狭域割削	
155	平瓦	厚さ 1.4~2.0	凹面：布目織（下部ナズ織有）、横書織 凸面：縦位ナズ（一部縦位ナズ） 粘土板一枚造り	7×8	ABD	明赤橙 2.5YR-5/8	B	広域割削	
156	平瓦	厚さ 1.2~1.5	凹面：布目織 斜角側面 縦向き織 粘土板一枚造り	6×5	ABD	黄灰 2.5Y-5/1	B	広域割削	
157	平瓦	厚さ 2.0~3.1	凹面：布目織、その他同一工具による縦位ナズ消し、端部ナズ調整 凸面：縦位ナズ調整 粘土板一枚造り	6×6	ABD	橙 5YR-6/6	B	狭域割削	
158	平瓦	厚さ 2.0~2.1	凹面：布目織（縦位ナズ消し） 凸面：縦位ナズ後縦位ナズ、側面裏取り 粘土板一枚造り	7×9	ABDE	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	破片	
159	平瓦	厚さ 2.0~2.1	凹面：布目織（縦位ナズ消し）、糸切り織 凸面：縦向き織（側面裏取り） 粘土板一枚造り	8×8	ABDJ	明赤橙 5YR-5/8	B	広域割削	
160	平瓦	厚さ 1.9~2.0	凹面：布目織（縦位ナズ消し）（端部ナズ） 凸面：縦位ナズ 粘土板一枚造り	—	ABIN	明赤橙 5YR-5/6	B	破片	
161	平瓦	厚さ 1.1~1.3	凹面：縦位ナズ消し 凸面：平行向き目織有 粘土板一枚造り	—	ABXK	暗黄 2.5Y-5/2	B	破片	



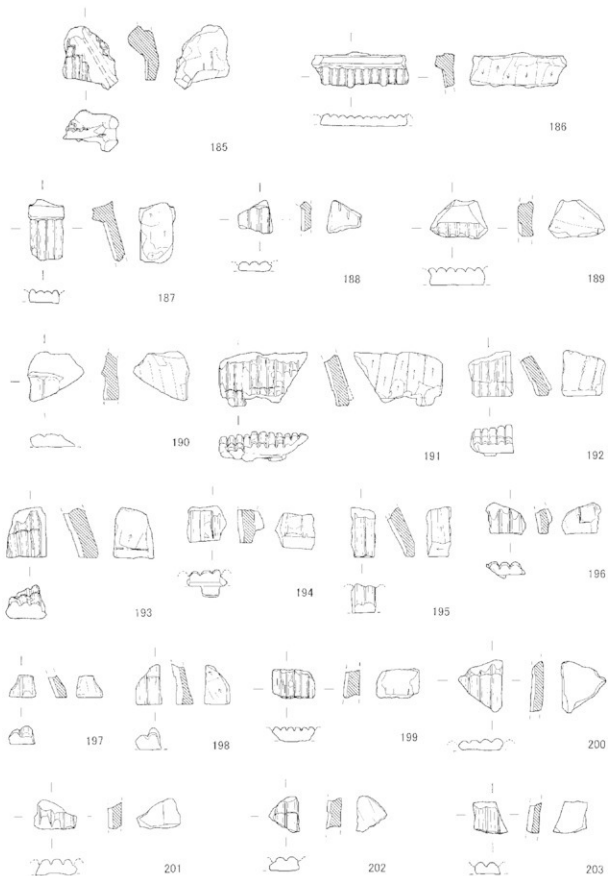
183



184

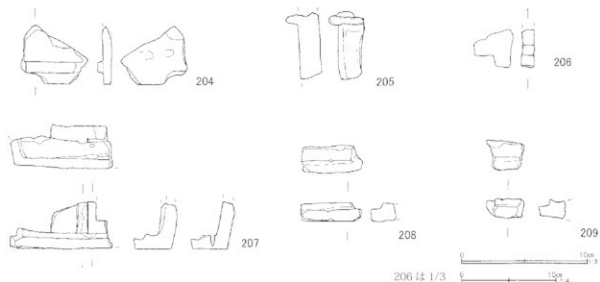


第37圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (24)



185～187、191、192、199は1/4

第38圖 第1号性格不明遺構出土遺物 (25)



第39図 第1号性格不明遺構出土遺物 (26)

第8表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表 (6)

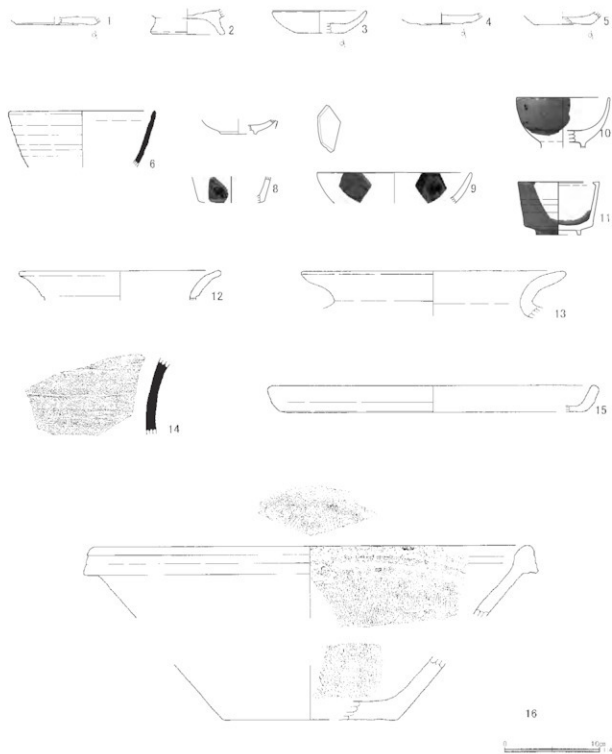
No.	器種	度量 (cm)	手法・形質の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
162	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	幅1.6cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具先端で爪線状の結線を残す 軒先から葺ぎ目まで1.8cm、～葺ぎ目長さ2.5cm 陶土の軒下・地盤木と地盤間に厚1.1cm程度の夾瓦が隙に貫通する 地盤木 長さ3.6cm 幅1.3cm 陶板木 長さ1.6cm 幅1.4cm 陶板木 1.3cm	ABFLMN	灰7.5Y5/1	B	—	南北全産 多武峰類型
163	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	幅約1.2cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具先端で爪線状の結線が残る 葺ぎ目長は軒先から2.3～2.5cmその先の葺ぎ目まで2.5cm、～ 3.2cm 赤木は陶板木、地盤木ともへうによる切り取り線が残された後 削り出す 軒下に一葉のみ(仮舟) 地盤木 長さ5.4cm 幅1.5cm 陶板木 長さ2.0cm 幅1.6cm	AFJN	灰7.5Y-5/1	B	破片	南北全産 多武峰類型
164	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.8cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結線を残す 葺ぎ目長は2.3cm 地盤木へうによる切り取り線を残した後削り出す 地盤木 幅1.3cm	ADFN	灰白2.5Y-7/1	B	破片	南北全産 多武峰類型 or 萩の原類型
165	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	軒裏わすかに赤飯 幅0.85cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 葺ぎ目は工具先端で爪線状の結線が残る 葺ぎ目長2.2～2.5cm 軒裏へラケズリ跡	ADNN	灰5Y-6/1	A	扉蓋上部 破片	南北全産 多武峰類型 or 萩の原類型
166	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.7～0.9cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結線を残す 葺ぎ目長は軒先から葺ぎ目まで1.5～1.7cm、その先の葺ぎ目は 2.1～2.4cm 赤木はへうによる切り取り線を残した後削り出す 切り取り線は赤木高部、地盤木軒下に残る(軒下一葉のみ(仮舟)) 地盤木 長さ6.3cm 幅0.8～1.2cm 陶板木 長さ2.6cm 幅0.8cm	ADN	灰黄2.5Y-6/2	B	扉蓋部軒先 破片	南北全産 多武峰類型 or 萩の原類型
167	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.8cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結線を残す 軒裏はへラケズリ跡 葺ぎ目長は4.5cm	ADFLMN	灰N-5/1	B	扉蓋部破片	大仏類型
168	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	幅1.2cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結線を残す 葺ぎ目長は3.5cm 軒裏はへラケズリによる削り出しか?	ADF	黄灰2.5Y-6/1	B	扉蓋部 上部破片	南北全産 大仏類型
169	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	幅1.1cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結線を残す 軒先～葺ぎ目5.4cm、～葺ぎ目4.3cm 陶板木、地盤木ともへうによる切り取り線が残された後削り出す 地盤木 長さ4～4.5cm 幅1～1.2cm 陶板木 長さ2.3～2.7cm 幅1.4～1.6cm	ADE	灰白5Y-8/1	B	扉蓋部軒先 破片	大仏類型
170	透光燻焼成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.9cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結線を残す(大半の葺ぎ目が押し 引き時にずり消される) 葺ぎ目長は軒先～葺ぎ目約4.5cm、～葺ぎ目3.5cm 地盤木・陶板木ともへうによる切り取り線を入れた後、削り出す 地盤木 長さ約4.4cm 幅1.4～1.6cm 陶板木 長さ約2.3cm 幅1.7cm	ADC	灰白5Y-7/1	B	扉蓋部破片	南北全産 大仏類型

No.	器種	流量 (cm)	手法・形状の特徴等	助土	色調	構成	残存率	備考
171	透光塩化 瓦葺 扉部	—	幅1.3cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先寸法は2.0cm以上 軒蓋はヘラケズリ	AB	灰白 7.5Y-6/1	B	扉蓋部 上部破片	大仏型
172	透光塩化 瓦葺 扉部	—	幅約0.9cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先寸法は2.3cm軒蓋はヘラケズリ調整	ABFN	灰白 5Y-7/1	B	扉蓋部 上部破片	南比企産 大仏型
173	透光塩化 瓦葺 扉部	—	幅1.1cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 扉部には、もろり出し 隅巻垂木 1.3cm	ADN	灰 7.5Y-6/1	A	扉蓋部軒先 破片	南比企産
174	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部奥隅部 角に結節表現の痕跡有	ADN	灰白 2.5Y-6/1	B	扉部破片	南比企産 萩の原型
175	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部扉面一部 外面にヘラ工具による節貫及び柱表現有	ABEFN	灰 5Y-5/1	A	扉部破片	南比企産 萩の原型
176	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉木として用いられた節貫部分の一部ヘラによる切り取り線を入 れた後削り出し、扉木を表現	ABDFN	淡黄 5Y-8/3	B	初期節貫 周辺	(初期入口?)
177	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部結節表現有「斗」の表現に凸形スタンプを使用	ADFN	灰白 2.5Y-7/1	B	破片	大仏型
178	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部扉面結節表現(裏伏粘土等の一部か?) 「斗」の表現に凸形スタンプ使用 スタンプ痕跡下部により凸表現がくずれる 下部に「持ち送り」との接合痕有	ADC	灰白 5Y-7/1	B	扉部破片	南比企産 大仏型
179	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部扉面の一部結節表現として凸形スタンプ有 下部には「持ち送り」の痕有	ABFN	灰 5Y-6/1	A	扉部破片	南比企産 大仏型
180	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部扉面結節表現(裏伏粘土等の一部か?) 「斗」の表現に凸形スタンプ使用 下部に「持ち送り」との接合痕有	ABDFN	灰 5Y-6/1	B	扉部破片	南比企産 大仏型
181	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部結節表現の一部 「持ち送り」部分と壁付粘土等の一部か? 左右への張り出しは節貫か? 扉面に壁との接合痕有	BFN	灰黄 2.5Y-7/2	B	扉部破片	南比企産 萩の原型
182	透光塩化 瓦葺 扉部	—	結節表現の一部(持ち送り) 節貫部分一部有 裏蓋接合痕有(壁付粘土等)	ADFN	灰黄 2.5Y-6/2	A	扉部初期 破片	萩の原型?
183	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部結節表現については、上段に成伏粘土等、中段に持ち送りがある その間に並伏粘土等から垂下させた伏伏粘土等(「斗」表現)に凸 形切り抜き及び切り抜き その下部には斗輪有 斗柄表現及び台輪はすべて粘土貼り付け 残存高 15.2cm 幅約 13.4~14.9cm 幅約 13.4~14.9cm	ABFN	黄 2.5Y-6/1	B	破片 70%	多武峰型
184	透光塩化 瓦葺 扉部	—	扉部扉面上段に横線による節貫、節貫の表現有 中位以降は、結節表現として裏伏粘土等の一部及び持ち送りの 一部残存(「斗」表現に凸形スタンプ有) 扉面にはハクリ痕多数有 残存高 19.2cm 幅約 19.9~19.5cm	ABFN	桃灰 10YR-6/1	B	扉部初期 30%	南比企産 類型不明
185	酸化塩化 瓦葺 扉部	—	幅0.7cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先～軒先寸法 約1.9~2.6cm 隅巻垂木はヘラによる切り取り線を挟した後に削り出す 隅巻垂木は削り付け後、ヘラ及び節による調整痕有 隅巻垂木 高1.8cm 幅約1.5~1.6cm 隅巻垂木 幅2.0~2.2cm	ABDFN	橙 5YR-6/6	B	扉蓋部破片	東山型 或 上西原型
186	酸化塩化 瓦葺 扉部	—	幅0.9cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先寸法は約2.0cm 軒蓋はヘラケズリ調整	ABDFN	橙 7.5YR-6/6	B	扉蓋部破片	東山型 或 上西原型
187	酸化塩化 瓦葺 扉部	—	幅0.8cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 軒蓋はヘラケズリ	ADFN	外: 黄 橙 2.5Y-3/1 内: に近い黄 橙 3YR-6/4	B	扉蓋部破片	東山型 或 上西原型
188	酸化塩化 瓦葺 扉部	—	幅0.7cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺ぎ目は調整不明軒蓋はヘラケズリか?	ABDFN	橙 5YR-6/6	B	扉蓋部 上部破片	東山型 或 上西原型
189	酸化塩化 瓦葺 or 瓦葺 扉部	—	幅0.8~0.9cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺の軒上部分か?	ABDFN	に近い黄 橙 5YR-6/4	B	扉蓋部破片	東山型 或 上西原型
190	酸化塩化 瓦葺 扉部	—	幅1.1cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 軒蓋はヘラケズリ	DN	灰白 7.5Y-8/1	B	扉蓋部破片	東山型 或 上西原型
191	酸化塩化 瓦葺 扉部	—	幅0.7cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 垂木はヘラによる切り取り線を挟した後に削り出し 垂木 幅1.7cm 残存長4.9cm	DE	外: に近い黄 橙 10YR-6/3 内: に近い黄 橙 7.5YR-7/4	B	扉蓋部破片	東山型 或 上西原型
192	酸化塩化 瓦葺 扉部	—	幅0.8~0.9cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先寸法は約1.7cm 隅巻垂木は削り付け後、ヘラ及び節による調整痕有 隅巻垂木 残存長2.6cm 幅1.5cm	DGFN	外: に近い黄 橙 10YR-6/3 内: に近い黄 橙 7.5YR-7/4	B	扉蓋部破片	東山型 或 上西原型
193	酸化塩化 瓦葺 扉部	—	幅0.7cmの半載竹管状工具による丸瓦表現 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先～軒先寸法 約1.8~2.4cm 軒蓋には垂木形成のための切り取り線及び削り出し痕有	ABDFN	に近い黄 橙 10YR-7/3	B	扉蓋部破片	東山型 或 上西原型

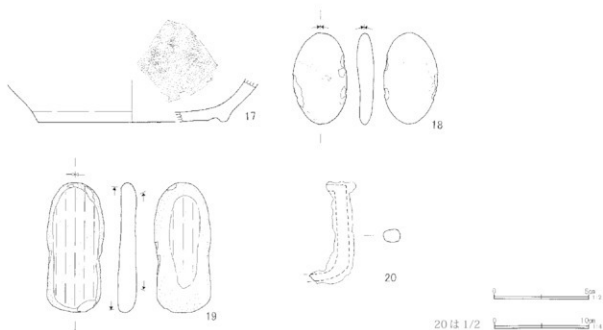
No.	器種	流量 (cm)	手法・形態の特徴等	出土	色調	構成	残存率	備考
194	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.7cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節か? 素土はへらによる削り出しか? 素土 残存長さ6cm、幅1.3cm	ADEI	にぶい黄褐色 10YR-4/3	B	扉蓋部 軒先部破片	東山類型 or 上西原類型
195	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.7cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先目長は3.35cm軒裏はヘラケズリ調整か?	ADEE	にぶい緑 7.5YR-6/3	B	扉蓋部 軒先部破片	東山類型 or 上西原類型
196	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.9cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 軒裏は両側素土(幅1.3cm)有 素土はへらによる削り取り後削り出し	ADEH	にぶい緑 7.5YR-6/4	B	扉蓋部破片	東山類型 or 上西原類型
197	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.8cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面	ABDJN	緑 5YR-6/6	B	扉蓋部破片	東山類型 or 上西原類型
198	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅1.0cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先から軒先目長は2.0cm 軒裏はヘラケズリ調整	AEI	緑 7.5YR-6/6	B	扉蓋部 軒先部破片	東山類型 or 上西原類型
199	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.7cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒裏に一部素土のへらによる削り取り残存	ADGHN	外: にぶい黄褐色 10YR-6/3 内: 黄灰 10YR-4/1	B	扉蓋部破片	東山類型 or 上西原類型
200	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅1.0cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す	ADEX	にぶい緑 5YR-6/4	B	扉蓋部破片	東山類型 or 上西原類型
201	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅1.1cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦の軒先目等の調整は不明軒裏はヘラケズリ	ADEG	緑 10YR-4/4	B	扉蓋部破片	東山類型 or 上西原類型
202	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.9cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す	ADN	緑 5YR-6/6	B	扉蓋部破片	東山類型 or 上西原類型
203	酸化塩漬成 瓦葺 扉蓋部	—	幅0.9cmの半截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節か? 軒裏へらによる削り出し	E	緑 7.5YR-6/6	B	扉蓋部破片	東山類型 or 上西原類型
204	酸化塩漬成 瓦葺 軸部	—	赤彩(台輪) 軸部設置、台輪の一部か?	BI	にぶい緑 7.5YR-7/4	B	破片	東山類型 or 上西原類型
205	酸化塩漬成 瓦葺 軸部	—	軸部角隅部分のみ残存 台輪部分取り付け残存 指ナゲ調整痕	ADEE	緑 5YR-6/6	B	破片	東山類型 or 上西原類型
206	酸化塩漬成 瓦葺 軸部	—	軸部植物表面(持ち送り)	ABEHKN	にぶい緑 7.5YR-6/4	B	植物表面 破片	東山類型 or 上西原類型
207	酸化塩漬成 瓦葺 基礎部	—	基礎部正面左角隅一層部分周部は陥凹になっており2段分有 右向きには開口部下のための方形の盛り有 開口部向きに垂直方向に1.1cmの深さで孔有(脚の軸受けか?) 柱部は、へらにより削り取り線を入れた後の削り出し(四角柱か?)	ABEIHKN	緑 7.5YR-7/6	B	初層軸部 破片	東山類型 or 上西原類型
208	酸化塩漬成 瓦葺 基礎部	—	基礎部正面右隅部になっており2段有 指ナゲによる調整痕	AEI	緑 7.5YR-6/6	B	初層軸部 破片	東山類型 or 上西原類型
209	酸化塩漬成 瓦葺 基礎部	—	基礎部正面陥凹になっており2段有 指ナゲによる調整痕	ABEJN	緑 5YR-6/6	B	初層軸部 破片	東山類型 or 上西原類型

4 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物については、主に表土剥ぎの際の一括遺物である。多量に出土したが、その内の大部分は調査区北西からであった。平瓦、丸瓦や瓦塔など、寺院に関連した遺物が多数あった。



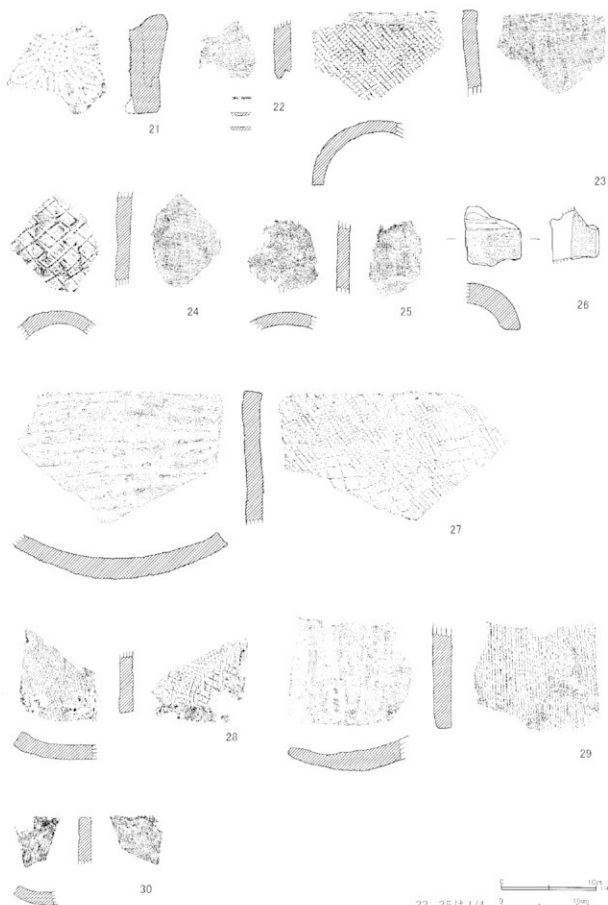
第40図 遺構外出土遺物(1)



第41図 遺構外出土遺物(2)

第9表 遺構外出土遺物観察表(1)

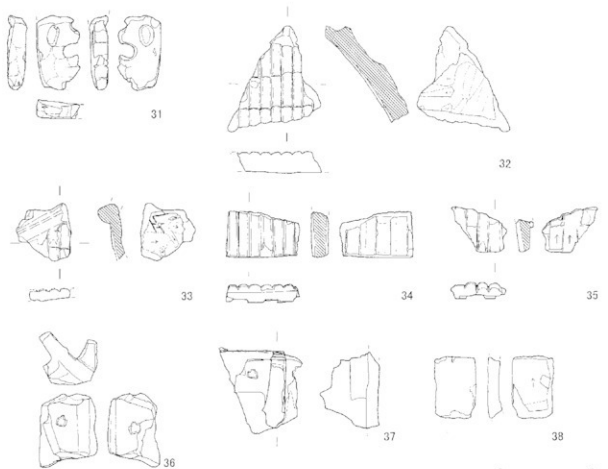
No.	遺種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	残存率	手法、形造の特徴等	備考
1	土師器 坪	—	(0.8)	(0.6)	H1	にぶい黄 2.5Y-6/3	B	底部20%	底部回転糸切り調整痕	
2	土師器 埴	—	(2.7)	7.8	ABCEKM	にぶい黄 7.5YR-7/3	B	底部(台部)90%	回転ナ字痕	
3	土師質土器 かわらけ	(10.0)	2.4	(4.8)	ABCEKM	淡黄緑 7.5YR-8/4	B	30%	底部回転糸切り	
4	土師質土器 皿?	—	(1.1)	4.8	ABCZEMO	橙 5YR-6/6	B	底部70%	底部回転糸切り	
5	土師質 杯(かわらけ)	—	—	(6.0)	ABDEK	淡黄緑 7.5YR-8/3	B	底部20%	底部回転糸切り痕有	
6	須恵系 埴	(15.8)	(6.0)	—	ABDEFN	黄灰 2.5Y-6/1	B	口縁部10%	回転ナ字	
7	磁器 碗	—	(1.6)	(3.8)	—	灰白	B	底部20%	内外面釉薬	
8	磁器 中皿	—	(2.7)	—	—	灰白	B	体部20%	内外面釉薬、外面青釉付 平盤形	
9	陶器 皿	(16.4)	(3.3)	—	B	灰白 2.50Y-8/1	B	口縁部10%	内外に模様有	
10	磁器 碗	(10.0)	(5.3)	—	A	灰白	B	口縁部~底部20%	染付透明草花文、底厚か? くらわんか碗	
11	陶器 香炉	(8.6)	5.5	4.7	B	淡黄 2.5Y-8/3	B	30%		
12	土師器 壺	(21.4)	(3.2)	—	ABMN	橙 5YR-7/6	B	口縁部10%	「コ」の字口縁か?	
13	陶器 壺	(28.0)	(4.9)	—	ABDEFMN	橙オリーブ灰 2.50Y-3/1	B	口縁部10%		
14	須恵系 壺?	—	—	—	DMN	灰 5Y-6/1	B	破片	外面 磨蝕工具による波状文有	
15	埴埴	(35.0)	2.8	(31.4)	ABEK	外: 灰褐 5YR-4/2 内: 橙 5YR-6/6	B	10%	土師質、浅め 口縁部入付有	
16	土師器 罎鉢	(44.0)	口縁部(7.6) 底部(6.6)	(18.6)	AENH	灰赤 7.5R-4/2	B	口縁部10% 底部30%	付着物多	
17	磁鉢	—	(4.5)	(20.0)	ACDEHMN	明赤 橙 2.5YR-5/6	B	底部20%	底部に高台有 内面磨目	
18	石製品	最大長 9.6 cm, 最大幅 5.8 cm, 最大厚 1.8 cm, 重量 132 g								
19	磨石	最大長 13.7 cm, 最大幅 6.0 cm, 最大厚 2.0 cm, 重量 278 g								
20	鉄製品	最大長 15.4 cm, 最大幅 2.4 cm, 最大厚 0.9 cm, 重量 8 g								



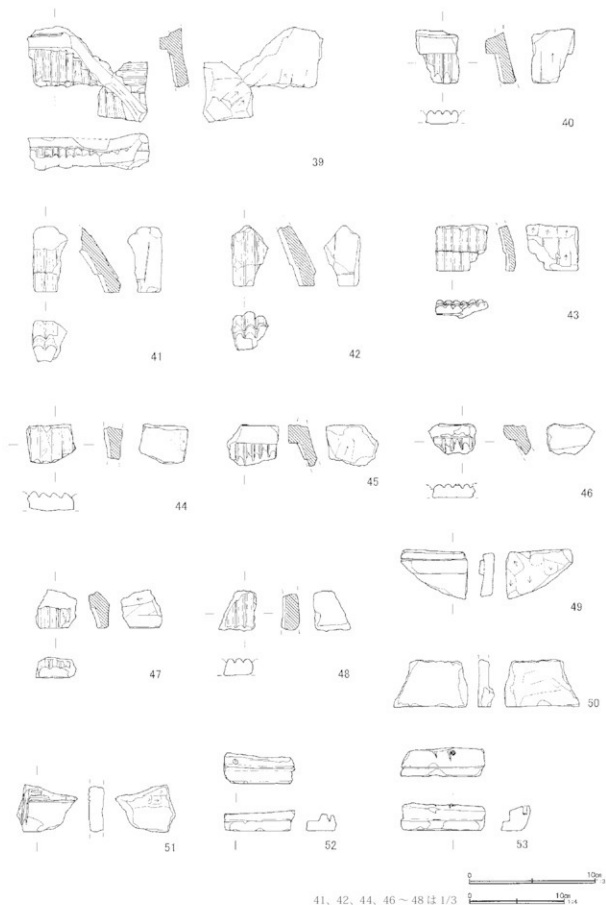
第42圖 遺構外出土遺物(3)

第10表 遺構外出土土物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	手法の特徴等	布目 (本 / 寸)	胎土	色調	焼成	残存率	備考
21	厚弁9葉蓮華文 軒丸瓦	直径 (16.2)	瓦当面：中厚直径5cm、蓮子20個(肉厚のもの)、間弁「Y」字状、界線なし、周縁は直立縁、縁面は平境 瓦当裏面：ケズリ接ナデ 成形技法：叩きつき(縁縁底部に布目痕わずかに有)	—	ARCSEM	瓦当面：焼灰N-3/ 内面：橙 2.5YR-6/6	B	瓦当部の一部	
22	三葉蓮華文 軒平瓦	厚さ 1.7~1.8	瓦当部の一部 粘土粘り付け後割離したものか?	—	ADON	灰白 2.5Y-7/1	B	瓦当破片	
23	丸瓦	厚さ 1.4~1.9	△面：斜格子小叩き(縁縁部のみ横位ナデ) 凹面：布目痕 粘土粘丸木造り	8×8	ADCI	灰5Y-6/1	B	広縁部破片	
24	丸瓦	厚さ 1.6~2.0	△面：斜格子大叩き 凹面：布目痕 粘土粘丸木造り	8×10	AFIN	焼灰 10YR-6/1	B	破片	
25	丸瓦	厚さ 1.3	△面：横位ナデ 凹面：布目痕、一部ナデ消し 五縁部平煎、粘土粘造り	7×6	ADON	黄灰 2.5Y-6/1	B	破片	
26	丸瓦 五縁式	—	△面：横位ナデ 凹面：布目痕	8×7	ADDFMN	灰N-4/	B	破片	
27	平瓦	厚さ 2.1~2.4	凹面：横位ナデ △面：斜格子大叩き(その上に一部小叩きを叩く) 粘土粘造り	—	ADMO	灰N-5/	B	30%	
28	平瓦	厚さ 1.6~2.2	凹面：布目痕、糸切り痕有 △面：斜格子叩き	6×6	DHN	黄灰 2.5Y-6/1	B	広縁部破片	
29	平瓦	厚さ 1.1~2.6	凹面：布目痕、横骨痕、布とじ目痕、縁部ナデ調整 △面：細叩き 粘土粘構造造り	7×7	ADHIN	にじい黄 2.5Y-6/4	B	破片	
30	平瓦	厚さ 1.4~1.8	凹面：横位ナデ △面：横位ナデ(わずかに指頭任痕有) 側面2次粘用有(すり痕)	—	DEN	橙 7.5YR-6/6	B	破片	



第43図 遺構外出土土物(4)



第44圖 遺構外出土遺物(5)

第11表 遺構外出土土遺物観察表(3)

No.	遺種	法量 (cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	構成	残存率	備考
31	還元焙焼成 瓦葺 欄外基礎部	—	表面ヘラケズリ痕 裏面欠調整	ABFIV	黄灰 2.5Y-5/1	B	初輪部 破片	南比企産 大仏型
32	還元焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅1.1cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 瓦葺ぎ目は4.0~4.5cm 軒表はヘラケズリ成形	BFVII	灰白 N-5/	B	扉蓋部破片	南比企産 大仏型
33	還元焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅1.0cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節か? 軒表はヘラによる結節痕多数有	ADW	灰白 2.5Y-6/1	B	扉蓋部破片	大仏型
34	還元焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅1.2cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目の調整は不明 垂木表面はヘラによる切り取り線が施された後削り出す 地垂木 長2.2cm 幅1.5cm	ADN	灰 N-5/	A	破片	大仏型
35	還元焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅1.2cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目の調整は不明 垂木表面はヘラによる切り取り線が施された後削り出す 地垂木 幅1.6cm 地垂木 長2.2cm 幅1.6cm	ADN	灰白 10Y-6/1	C	扉蓋部破片	大仏型
36	還元焙焼成 瓦葺 軸部	—	軸部壁面欠か? 植物表面としての「斗」表側に凸型スタンプ有 (2箇所、不揃い) 持ち送りの一部と思われる突起	ABIN	黄灰 2.5Y-6/1	B	軸部破片	南比企産 大仏型
37	還元焙焼成 瓦葺 軸部	—	軸部表面表は、上段は欠損、中段は葉状粘土帯及び持ち送りの 一部残存 (「斗」表側に凸型スタンプ有) 植物表面における粘土帯は必ず壁面への起り合わせ	ABFIV	灰白 10YR-7/1	B	軸部破片	南比企産 大仏型
38	還元焙焼成 瓦葺 軸部	—	軸部壁面の一部か?	ABFJ	灰 5Y-5/1	B	軸部破片	南比企産
39	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅0.7~0.8cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒表長は2.7~2.9cm 地垂木、隅垂木ともヘラによる切り取り線を施した後削り出す 地垂木 長1.3cm 幅1.3cm 隅垂木 幅1.5cm	EH	にぶい橙 5YR-6/4	B	扉蓋部破片	東山型 or 上西原型
40	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅1.1cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目の調整は不明 垂木はヘラによる切り取り線が施された後削り出す 地垂木 長2.6cm 幅1.6cm	ADK	外-黄灰 2.5Y-7/3 内-にぶい橙 5YR-7/4	B	扉蓋部破片	東山型 or 上西原型
41	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅0.8cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒表長は軒先から軒ぎりまで2.1cm 地垂木はヘラによる切り取り線が施された後削り出す 地垂木 長3.3cm 幅1.7cm	ADEG	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	扉蓋部破片	東山型 or 上西原型
42	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅0.8cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒表長は軒先から軒ぎりまで1.4cm、軒ぎりから残存部まで2.8cm 垂木はヘラによる切り取り線が施された後削り出す 地垂木 長2.3cm 幅1.7cm	ADE	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	扉蓋部破片	東山型 or 上西原型
43	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅0.7~0.8cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒先から軒ぎりまでの約1.7cm軒ぎりから残存部が2.4cm垂木はヘラによる削り出しで作成 地垂木 長2.7cm 幅1.6cm	ABDEW	橙 7.5YR-7/6	B	扉蓋部破片	東山型 or 上西原型
44	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅0.7~0.8cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す軒表はヘラケズリ	ABCEIN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	扉蓋部破片	東山型 or 上西原型
45	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅0.7cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目は工具押し引きによる結節を挟す 軒表ヘラケズリ	ABDOON	外-にぶい橙 5YR-6/3 内-橙 7.5YR-7/6	B	扉蓋部破片	東山型 or 上西原型
46	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅0.7cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目の調整は不明 軒表ヘラケズリ成形	ABDEIN	外-黄 7.5YR-2/1 内-にぶい橙 7.5YR-6/4	B	扉蓋部破片	東山型 or 上西原型
47	瓦管 扉基部	—	折行部の軒先部の一部か?	AE	橙 5YR-6/6	B	破片	東山型 or 上西原型
48	酸化焙焼成 瓦葺 扉基部	—	幅0.8cmの平截竹管状工具による丸瓦裏面 瓦葺ぎ目の調整は不明裏面はヘラケズリ痕	ABCIJN	橙 5YR-6/6	B	破片	東山型 or 上西原型
49	酸化焙焼成 瓦葺 軸部	—	壁面における植物表面 (頭貫部分) 裏面ヘラケズリ	ABEHN	橙 5YR-6/6	B	初輪部破片	東山型 or 上西原型
50	酸化焙焼成 瓦葺 軸部	—	軸部壁面欠か? 表面ヘラケズリ調整	ABEN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	軸部破片	東山型 or 上西原型
51	酸化焙焼成 瓦葺 軸部	—	軸部壁面の一部か? 補修工具による補引痕有	ABDEI	明赤橙 2.5YR-5/8	B	軸部破片	東山型 or 上西原型
52	酸化焙焼成 瓦葺 基礎部	—	基礎部正面壁状になっており2段有 左端上部に0.8cmの深さで孔有 (扉の軸受けか?) 指ナデによる調整有	ABCEIM	にぶい橙 5YR-5/4	B	初輪部破片	東山型 or 上西原型
53	酸化焙焼成 瓦葺 軸部	—	階段部二段 上段部竹管状工具による孔有 (0.4cm、扉の軸受けか?)	ABDEKN	橙 5YR-6/6	B	初輪基礎部破 片	東山型 or 上西原型

V 調査のまとめ

1 調査全体の所見

熊谷市西別府と隣接する深谷市には、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡、西別府遺跡と、深谷市の幡羅官衙遺跡の4遺跡があり、これまでの調査により、それらは古代の幡羅郡役所跡及びそれに関わる遺跡であることが明らかとなっている。

また、平成30年2月にはその内の2遺跡（西別府祭祀遺跡、幡羅官衙遺跡）が国指定史跡「幡羅官衙遺跡群」となったことから、その重要性が再確認されたところである。西別府廃寺もその遺跡群を構成する一つとして、今回の発掘調査の成果は今後の研究を行う上で、有用なものとなる。

今回の調査の所見は、まず第1号性格不明遺構について、その性格を明確に判断することは難しいが、一か所で多量の瓦、瓦塔などの遺物が検出されていること、規模が20mほどの大きな掘り込みであることから、意図して掘られた遺構であったことがわかる。

次に、その第1号性格不明遺構の南東隅付近で確認されたピット（第17～19号ピット）はその掘り方から柱穴であることがわかり、規模も直径1.5m以上と大きいため、寺院に関係する建築物の柱穴ではないかと推定される。

一方、今回多くの出土量を誇った遺物についても大きな成果であった。それは、瓦の総数4,365枚、瓦塔片の91点であり、特に瓦塔の検出点数はこれまでの西別府廃寺における調査の中で最大であった。

2 遺構について

(1) 第1号性格不明遺構の考察

第1号性格不明遺構（以下、SXO1と記す）は、およそ東西方向から北西～南東方向に軸が傾いている20mほどの溝状の大きな掘り込みである。

今回の調査区は、過去の発掘調査から寺院の伽藍内に位置すると考えられ、また、塔ないしは金堂と推定される基壇部が、調査箇所からおよそ27m北に位置すると推定される。そのことから本調査区は、推定される伽藍配置から中門などが位置する寺院の南部分にあたる。よって、本遺構は、それらを横切る形で溝や堀とは考えにくい。仮に溝や堀と考えたとしても、流水の形跡は確認できず、空堀としても、この参道となるべき位置に南北を分断する形で設けるには、いささか不自然であると考えられる。

さて一つの可能性として考えられるのは、寺院建物の基壇部の、版築地業を行う際に掘られた「土取り」である。通常、寺院などの大規模な建築物の場合、その土台となる部分に堅牢な版築地業を行う。その規模から考えて、かなりの量の土を利用する必要があり、そのことから、このSXO1は、版築地業のための土取り土坑と考えることができる。

地震や火災などにより倒壊した堂宇を再建するため、新たな基壇を構築し直すために土取りを行い、その場所を利用し、瓦などを遺棄した可能性が考えられる。すなわち、SXO1は、土取り土坑としての性格と、廃棄土坑としての性格を併せ持つという考えがある。

しかしながら、これまでに調査された古代寺院での先例があるように、版築地業に用いるための土取り土坑は、寺院の裏側など目立たない場所に設けるため、表の参道を横切るような場所に設けることは考えにくい。

特に、出土瓦塔の時期をみると、瓦塔には還元焰焼成と酸化焰焼成の2種が確認でき、そのうち酸化焰焼成の瓦塔は、池田氏の分類によると東山類型及び北上原類型に比定され、その時期は8世紀末から9世紀初頭以降、遅くて9世紀後半でも早い時期以降に廃棄されたと考えるのが妥当である。

さて、これまでの調査から、西別府廃寺の存続時期は9世紀後半までと考えられている。仮に、このSXO1が廃棄土坑としての使われ方をしたとすれば、酸化焰焼成の瓦塔の時期から先述の9世紀初頭以降ないしは9世紀後半でも早い時期以降に寺院が廃絶（伽藍の崩壊）を迎えたものと考えられる。さらに、本遺構の出土遺物には、完形の均整唐草文軒平瓦も見られたことから、その時期が8世紀後半から9世紀前半と幅があるものの、瓦としての性格から最も遅い時期の9世紀前半までは寺院堂宇の屋根

を飾っていたとするのが適当であると考えられる。以上の2点から、寺院の廃絶時期がこれまでの調査結果に照らし、9世紀後半でも早い時期に伽藍の崩壊を迎えていたとする考えも浮上する。

いずれにしても、本遺構を廃棄遺構としての性格があったと考えることは、現状では無理がなく、むしろ寺院の廃絶時期を考える上で、補充する情報を提供したと考えられる。それは、本遺構が形成された位置や出土遺物から、寺院廃絶に伴い、堂宇に近接した位置に廃棄土坑を掘削し、不要となった様々なものを投棄したとするものである。

なお、廃棄土坑としての性格をもつと考える上で、いくつか不安材料がある。それは東西に長い溝状の大規模な遺構の割に、遺物出土状況が北西に集中していること、そして、土層断面観察から、一度の掘削ではなく、少なくとも2回にわたり掘削されていることである。前者については、位置関係から廃寺Ⅱの調査で検出された第1号瓦溜り状遺構(SU1)に近接することから、不用物を廃棄するために、時期や位置を違えて廃棄土坑を形成したことが考えられるが、SU1は、現状では伽藍が存続している時期の8世紀前半から9世紀前半までの遺物が出土していることや、堅欠建物跡を転用したことから、本遺構と比較すると小規模な廃棄土坑であり、本遺構と状況を異にする。

一方、後者については、単純に廃棄の時期が複数あることと、廃棄物の差異があったことも想定される。その廃棄物の差異については、前者の事象にも関わって、北西部には主に屋根瓦を集中して投棄し埋め、その後改めて東に大きな廃棄土坑を掘削し、片付けた堂宇の木材を中心に廃棄したとすれば、有機質の木材だけ朽ちて消失したと考えられるのではないだろうか。ただし、土層の観察からは、これを証明する証拠は認められなかった。

(2) 柱穴遺構(第17～19号ピット)の考察

第1号性格不明遺構(SX01)内からは、重複する形で、柱穴と思われる大きなピットが確認された。第17号ピット、第18号ピット、第19号ピットがそれにあたる。SX01に切られていたが、平面及び土層断面観察から、柱穴であると判断できた。また、3基とも掘り込みが東西二か所に存在することから掘り直しが行われたことが推定される。

これまでの調査による成果からの推測による伽藍配置の位置からすると、このピット付近は過去の調査により推定されている講堂の南にあたり、やや外れはするが、中門などの大型の建物があってもおかしくない位置に存在する。遺物の出土が僅かなため、確実な時期は判断できないが、SX01に掘り込まれていることから、それ以前である8世紀前半～後半の遺構であると考えられる。

それぞれのピットは2箇所の落ち込みがあり、それぞれのピットの西寄りの落ち込みで1組、東寄りの落ち込みで1組が組み合わせとして有力だろう。まず西よりの落ち込みから測量すると、第17～第19号ピットの順で、2.1m～4.0mとなる。続けて東寄りの落ち込みは、2.0m～4.0mとなる。このことから、ピット間の幅は異なるが、建て替え前と後で同様の幅での柱間であることから、意識的、計画的に掘られたことが分かる。

3 遺物について

今回出土した遺物の大半が寺院に関連するものであり、今回初めて完形での検出となった均整唐草文軒平瓦や多種の瓦塔片を検出することができたのは、大きな成果であったと言える。

1 瓦(第12表～15表)

今回の調査では、総数4,365点(軒平瓦13点、軒丸瓦8点、平瓦2,727点、丸瓦569点、種類不明1,048点)の瓦が確認されている。第1次、第2次調査(廃寺Ⅰ、Ⅱ)同様の種類に大別される瓦であり、新たな種類の瓦は確認されていない。うち丸瓦は、玉縁式と行基式の2種であり、大半が行基式であり、玉縁式はわずか2点のみである。なお、丸、平瓦とも、凸面の成形、調整の相違によって、さらに格子叩き・縄目叩き・平行叩き・ナデ・ヘラケズリと区分ができる。

今回は、廃寺Ⅰ、Ⅱの瓦形式分類を継承し、本調査における成果を加えた形で表にまとめた。なお、各表の備考には今回検出の遺物番号を示した。なお、これまでに西別府廃寺の軒丸瓦は9種類確認され

ウ 丸瓦

丸瓦は、569 点検出された。玉縁式と行基式とに分類でき、玉縁式は 2 点のみで、それ以外の 567 点が行基式と考えられる。

1 次形成の段階では a 粘土紐丸木造り、b 粘土板丸木造りがある。その後、2 次形成で凸、凹面に調整がなされる。凹面の大半は布目痕であるが、一部にナデ調整がなされたものもある。

凸面は調整を区別すると 1 格子叩き、2 縄叩き、3 ナデ調整、4 ヘラケズリの 4 パターンに分類できる。行基式の 567 点中、1 は 148 点、2 は 45 点、3 は 373 点、4 は 1 点であり、ナデ調整による調整の丸瓦が全体の約 66% を占める。

なお、廃寺 I、II と今回の調査分を含めて再分類すると、第 14 表のとおりに分類することができる。

第 14 表 丸瓦分類表

I	玉縁式	a	粘土紐丸木造り	凸面調整		凹面調整	備考			
				大分類	小分類					
II	行基式	a	粘土紐丸木造り	1	格子叩き痕	布目痕 布目痕 (一部横筋ナデ調整) 布目痕及び縦筋ナデ調整	第 26 面 106 第 23 面 86			
					格子叩き小叩き	布目痕 縦筋ナデ調整	第 22 面 97 面、第 24 面 90 91 第 24 面 92 93 94			
					格子叩き小叩き→一部格子大叩き	布目痕				
					格子叩き小叩き→一部格子小叩き	布目痕				
				2	縄叩き痕	縦筋ナデ調整 布目痕 (横筋ナデ調整)	第 24 面 95			
					ナデ調整痕	布目痕 (一部横筋ナデ調整) ナデ調整	第 25 面 96 97 98 101 102、第 26 面 104 105			
				3	ヘラケズリ調整痕	縦筋ナデ調整 布目痕 (縦筋ナデ消し)	第 25 面 100			
					ナデ調整痕	ヘラケズリ後縦筋ナデ調整 布目痕	第 25 面 99			
				b	粘土板丸木造り	3	ナデ調整痕	縦筋ナデ調整	布目痕 (横ナデ消し)	第 25 面 102

エ 平瓦

平瓦は 2,727 点検出された。第 1 次形成が 4 種類であり、a 粘土紐桶巻造り、b 粘土板桶巻造り、c 粘土紐一枚造り、d 粘土板一枚造りに分類される。続いて 2 次調整はいずれも凹面に布目痕を残すものが大半であるが、一部にヘラケズリ調整を施すものが確認される。また、粘土紐桶巻造りの一部にはナデ調整が確認されるものがあった。

凸面は丸瓦同様に 4 パターンの調整があり、1 格子叩き痕、2 縄叩き痕、3 ナデ調整痕、4 平行叩き痕が確認できる。この凸面調整からみると全体の 2,727 点中、1 は 489 点、2 は 918 点、3 は 1,318 点、4 は 2 点で、縄叩きによる調整が全体の半数の約 48% を占め、次いでナデ調整が全体の約 34% を占める。なお、廃寺 I、II と今回の調査分を含め再分類すると、第 15 表のとおり分類できる。

第 15 表 平瓦分類表

	材料・型	凸面調整		凹面	備考
		大分類	小分類		
a	粘土紐桶巻造り	1	格子叩き	新格子小叩き	布目痕 縦筋ナデ調整
				新格子大叩き	布目痕
				新格子大叩き及び新格子小叩き	縦筋ナデ調整
				新格子 (格子間広い) 小叩き	布目痕 (一部ヘラケズリ)
b	粘土板桶巻造り	3	ナデ調整	長格子叩き	布目痕 ナデ調整
				縦筋ナデ調整 (一部縦筋ナデ消し)	布目痕
		1	格子叩き	正格子大叩き	布目痕
				新格子大叩き (ナデ消し)	布目痕
				新格子小叩き	布目痕
				正格子小叩き (一部ナデ消し)	縦筋ナデ調整 (布目痕残存)
		2	縄叩き	縦叩き痕	布目痕 (横筋ナデ消し)
				縦叩き後ナデ消し	布目痕 (ナデ消し)
				縦筋ナデ調整	布目痕
				縦筋ナデ調整	布目痕 (ナデ消し)
ヘラケズリ					
縦筋ナデ調整	布目痕				
3	ナデ調整	縦筋ナデ調整	布目痕		
		ヘラケズリ			
		斜筋ナデ調整	布目痕		
c	粘土紐一枚造り	1	格子叩き	新格子大叩き	布目痕
				新格子小叩き	縦筋ナデ調整
d	粘土板一枚造り	1	格子叩き	新格子小叩き→ナデ調整	布目痕 (ナデ消し)
				新格子大叩き後叩き	縦筋ナデ調整
				新格子大叩き後小叩き	布目痕
		2	縄叩き	縦叩き痕	布目痕
				縦筋ナデ調整	布目痕 (横筋ナデ消し)
				縦筋ナデ調整	布目痕 (縦筋ナデ消し)
3	ナデ調整	縦筋ナデ調整	布目痕 (縦筋ナデ消し)		
		平行叩き	縦筋ナデ調整		

2 瓦塔

瓦塔は91点検出され、うち水輪部1点、屋蓋部57点、軸部25点（うち初輪部8点）であった。これまでの調査と比較し水輪部や初輪部が始めての検出となったほか、屋蓋部や軸部でも塔の様相が分かるものが多数検出されており、貴重な発見となった。これらの瓦塔は、ほぼすべてが第1号性格不明遺構（SX01）からの検出であり、それ以外は表採であった。

瓦塔の分類については、これまで池田敏宏氏によって屋蓋部表現手法の特徴から検討されており、今回の分類はその池田氏に御教示いただいたうえでおこなっている。

先述した池田氏の分類に基づく、酸化焙焼成のものは東山類型と上西原類型に分類でき、これらの瓦塔は、8世紀末から9世紀中葉に位置づけできる。一方、酸化焙焼成の瓦塔に先行する還元焙焼成の瓦塔は大仏類型が一番多く、それ以外の還元焙焼成のものも多武峯類型、萩の原類型のいずれかに分類できるが、不明なものも存在する。また、これらの瓦塔は8世紀初頭から9世紀初頭に位置づけられる。

以下、池田氏の分類に基づき各類型に分類した。なお、その各類型の時期は、多武峯類型が8世紀初頭～前葉、萩の原類型及び大仏類型が8世紀後葉～9世紀初頭、東山類型が8世紀末葉～9世紀前葉、上西原類型が9世紀前葉～中葉である。また、各類型の指標となる表現手法の特徴などについては、参考文献の池田敏宏1995・1996・1998・1999a・2000などを参照された。

まず、SX01では、多武峯類型が第34図162・163、第37図183の3点、萩の原類型は、第36図174・175・181・182の4点（182は検討の余地有）、多武峯類型または萩の原類型が第34図164・165・166の3点、大仏類型が、第35図167～172、第36図177～180の10点、東山類型及び上西原類型は、第38・39図185～209の25点（酸化焙焼成からこの2類型まで絞ることはできるが、この2類型の相違である垂木の間隔を確認できるほど残存状態がよくない）であった。

続いて、表採では多武峯類型及び萩の原類型はなく、大仏類型が、第43図31～37の7点、東山類型及び上西原類型が、第44図39～53の15点となる。

よって、点数からみると、8世紀末～9世紀中葉である東山類型及び上西原類型の瓦塔が多く検出されている。

さらに、特徴のある個体を確認すると、第34図162・163及び第37図183は、類型以外にも胎土、焼成などから類似点があることから、同一個体もしくは同一窯の可能性が高い。なお、第37図183は軸部の組物表現から東京都東村山市のNo.2遺跡検出の瓦塔と類似性がみられ、表現からNo.2遺跡のものより183は古いものと推定される。

一方、第38図184の瓦塔軸部は上部に櫛描きによる柱表現で、下部の斗拱部を粘土帯で表現しているが、いずれの類型にも分類できない。

このように、8世紀初頭～9世紀中葉の寺院創建期から廃寺に至るまでの瓦塔の変遷を垣間見ることができ、瓦塔は、東山類型及び上西原類型の40点と、大仏類型の17点が主体を占めており、時期の違う類型の瓦塔が一朝からまとまって検出されたことは、創建時のものやそれ以降新たに設置されたものが同時期に存在していたことをうかがわせる。それは、信仰の対象として寺院内の堂内などに大切に安置されていたことが考えられる。また、先に検討したようにSX01が掘られた時期を、東山類型及び上西原類型の検出から8世紀末から9世紀中葉以降と捉えることができた。

さて、この西別府廃寺を始め、隣接する西別府遺跡、西別府祭祀遺跡、深谷市の幡羅官衙遺跡を含めた幡羅官衙遺跡群はその一部が国指定史跡となったことで、今後さらに注目を集めていくこととなろう。西別府廃寺については、寺院の伽藍配置などまだまだ不明な点が多く、今回の調査でもその解明はできなかった。しかし、遠回りをしながらも、少しずつ寺院の様相を解明しつつあることは事実であり、今回の発掘調査はその一躍を担うことができたと考えている。

参考文献

- 高橋光司 1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74号-3 日本考古学会
- 高橋一夫他 1984 「シンポジウム『北武蔵の古代寺院と瓦』」『埼玉考古』第22号 埼玉考古学会
- 高橋一夫 1987 「北武蔵における古代寺院の成立と展開」『埼玉の考古学』新人物往來社
- 坂田敏行 2009 「製作技法・表現方法からみる東日本出土瓦塔」『研究紀要』第24号（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梶原義実 2008 「横置型一本作り軒丸瓦の諸技法とその年代」『名古屋大学文学部研究論集史学54』
- 池田敏宏 1995 「瓦塔屋蓋部表現手法の検討—埼玉県児玉町堂平遺跡採集瓦塔をめぐって—」『土曜考古』第19号 土曜考古学研究会
- 池田敏宏 1996 「瓦塔屋蓋部編年試論—北武蔵6～8類瓦塔、類似資料を中心として—」『土曜考古』第20号 土曜考古学研究会
- 池田敏宏 1998 「瓦塔屋蓋部編年試論Ⅱ—北武蔵1～5類瓦塔、類似資料を中心として—」『土曜考古』第22号 土曜考古学研究会
- 池田敏宏 1999a 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討」【研究紀要】7 栃木県文化振興事業団文化財センター
- 池田敏宏 1999b 「東国の瓦塔出土遺跡」『第13回企画展 仏堂のある風景—古代のムラと仏教信仰—』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 池田敏宏 2000 「瓦塔」『古代仏教系遺物集成・関東 考古学の新たな開拓をめざして』考古学資料から古代を考える会事務局
- 酒井清治 1995 「熊谷市西別府廃寺出土の瓦について」『王朝の考古学』雄山閣
- 昼間孝志他 1986 「北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅰ」『研究紀要』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 昼間孝志他 1988 「北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅱ」『研究紀要』第4号（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 永井邦仁 2006 「東海地方の古代瓦塔研究ノオト」『研究紀要』7 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁 2008 「猿投窯型瓦塔の展開（1）—信濃の猿投窯型瓦塔—」『研究紀要』9 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁 2009 「猿投窯型瓦塔の展開（2）—猿投窯以前—」『研究紀要』10 愛知県埋蔵文化財センター
- 吉野 健 1992 『西別府廃寺』熊谷市教育委員会
- 吉野 健 1994 『西別府廃寺（第二次）』熊谷市教育委員会
- 吉野 健他 2000 『西別府祭祀遺跡』熊谷市教育委員会
- 吉野 健 2009 『西別府祭祀遺跡Ⅱ』熊谷市教育委員会
- 吉野 健 2011 『西別府祭祀遺跡Ⅲ』熊谷市教育委員会
- 吉野 健 2011 「西別府廃寺・西別府祭祀遺跡の調査成果」『シンポジウム 郡家の成立と機能—幡羅遺跡をめぐる問題—』深谷市教育委員会
- 吉野 健 2012 『西別府遺跡Ⅰ 西別府廃寺Ⅲ』熊谷市教育委員会
- 吉野 健 2012 『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡 総括報告書Ⅰ』

写真図版



均整唐草文軒平瓦



瓦塔軸部



調査区全景（上空から上が北）



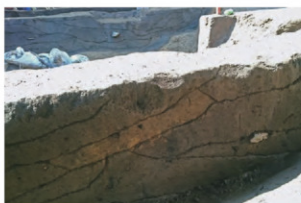
第1号性格不明遺構（南東から）



D・E-3グリッド周辺（上空から上が北）



第1号性格不明遺構土層断面A-A'一部



第1号性格不明遺構土層断面E-E'一部

図版 2



第16号ピット（南から）



第17号、18号ピット（南から）



第19号ピット（南から）



第1号性格不明遺構 B-1グリッド付近



第1号性格不明遺構 遺物検出状況1



第1号性格不明遺構 遺物検出状況2



第1号性格不明遺構 遺物検出状況3



均整唐草文軒平瓦 検出状況1



均整唐草文軒平瓦 検出状況2



第 14 图 1



第 14 图 5



第 14 图 6



第 14 图 8



第 14 图 15



第 14 图 16



第 14 图 19



第 14 图 20



第 14 图 25



第 14 图 27



第 14 图 28



第 15 图 34



第 15 图 36



第 15 图 37



第 15 图 42



第 15 图 46



第 16 图 49. 57. 50 ~ 56. 58



第 16 图 59



第 18 图 68



第 18 图 69



第 18 图 70



第 18 图 71



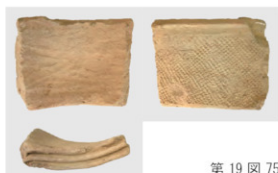
第 19 图 74. 76. 78. 79



第 18 图 72



第 18 图 73



第 19 图 75



第 19 图 77



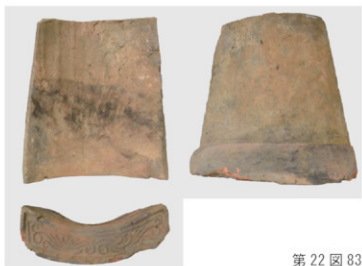
第 19 图 80



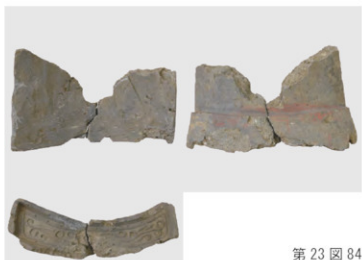
第 20 图 81



第 21 图 82



第 22 图 83



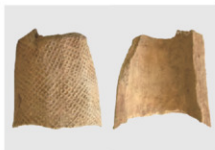
第 23 图 84



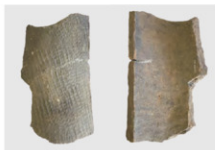
第 23 图 86



第 23 图 87



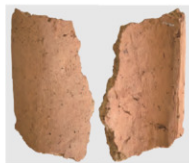
第 24 图 90



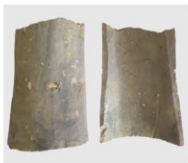
第 24 图 92



第 24 图 94



第 24 图 95



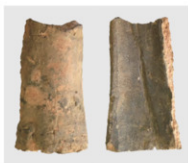
第 25 图 96



第 25 图 101



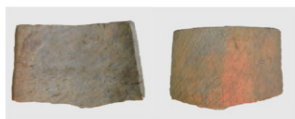
第 25 图 102



第 26 图 105



第 26 图 106



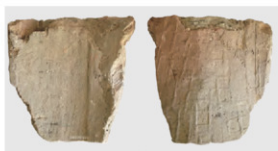
第 26 图 107



第 26 图 108



第 26 图 109



第 27 图 110



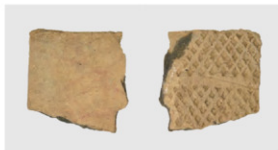
第 27 图 111



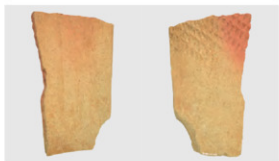
第 27 图 112



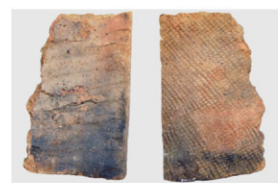
第 27 图 114



第 27 图 116



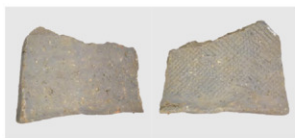
第 27 图 117



第 28 图 119



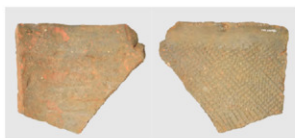
第 28 图 121



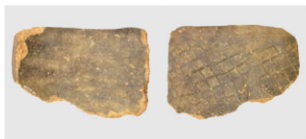
第 28 图 122



第 28 图 123



第 29 图 124



第 29 图 126



第 29 图 127



第 30 图 128



第 30 图 129



第 30 图 131



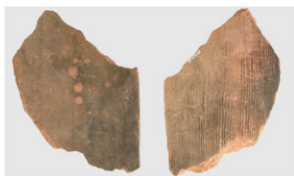
第 30 图 132



第 30 图 133



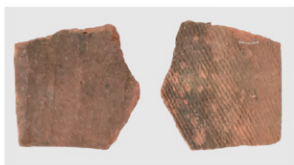
第 30 图 135



第 31 图 137



第 31 图 139



第 31 图 140



第 31 图 141



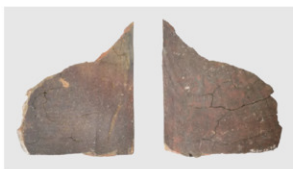
第 32 图 146



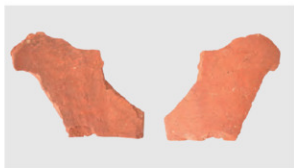
第 32 图 147



第 32 图 150



第 32 图 153



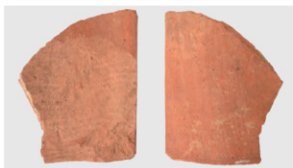
第 33 图 155



第 33 图 156



第 33 图 157



第 33 图 159



第 34 图 162



第 34 图 163



第 34 图 164



第 35 图 165



第 35 图 166



第 35 图 167



第 35 图 171. 173. 168



第 35 图 172



第 35 图 169



第 35 图 170



第 36 图 174



第 36 图 175



第 36 图 181



第 36 图 176



第 36 图 182



第 36 图 177



第 36 图 178



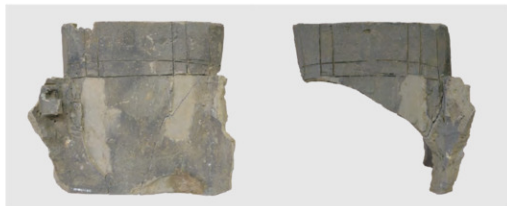
第 36 图 179



第 36 图 180



第 37 图 183



第 37 图 184



第 38 图 185



第 38 图 186



第 38 图 187



第 38 图 上段 199. 190. 193. 200
下段 201. 194. 202



第 38 图 191



第 38 图 上段 195. 196. 188. 197
下段 198. 203. 189



第 38 图 192



第 39 图 204



第 39 图 205



第 39 图 207



第 39 图 208



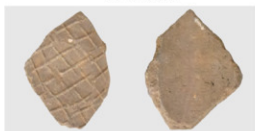
第 39 图 209



第 42 图 21



第 42 图 23



第 42 图 24



第 42 图 26



第 42 图 27



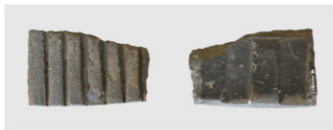
第 42 图 29



第 43 図 31



第 43 図 32



第 43 図 34



第 43 図 33



第 43 図 35



第 43 図 36



第 43 図 37



第 44 図 39



第 44 図 上段 40 ~ 43
下段 44 ~ 48



第 44 図 49



第 44 図 50



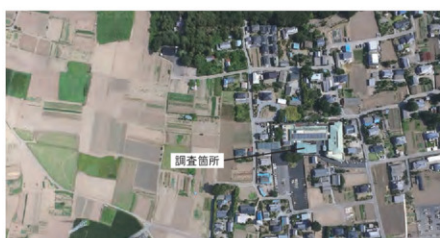
第 44 図 51



第 44 図 52



第 44 図 53



調査箇所周辺（上空から上が北）

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしべつぷはいじよん							
書名	西別府廃寺IV							
副書名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	第28集							
編集者名	腰塚 博隆							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL 048-536-5062							
発行年月日	西暦2018(平成30)年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°'")	(°'")		(㎡)	
にしべつぷはいじよん 西別府廃寺	くまがやしにしべつぷはいじよん 熊谷市西別府字西方 1599番5	11202	59-002	36° 11' 29"	139° 19' 54"	20160719 \	339.29㎡	事務所 多目的ホール 増築のため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西別府廃寺	寺院	奈良・ 平安時代	土坑 4基 ピット 19基 (うち柱穴5基) 性格不明遺構1基	須恵器・土師器・ 軒平瓦・軒丸瓦・ 平瓦・丸瓦・瓦 塔・瓦堂・鉄製 品・石器・陶磁 器		<ul style="list-style-type: none"> ・寺院廃絶に伴う廃棄土坑と考えられる大量の瓦等の遺物が出土した大規模な掘り込みを確認。 ・伽藍の中門の柱穴の可能性のあるピットが検出された。 ・遺物については、完形の「均整唐草文軒平瓦」出土及び過去最大の点数の瓦塔の出土である。 		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集

西別府庵寺IV

平成30年3月26日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／朝日印刷工業株式会社

